

R LとL Rの附加条で、横方向に回転施文され、羽状繩文を構成している。内外面とも丁寧に調整され、色調は外面はにぶい橙～黒褐色、内面は暗褐色である。焼成は堅致である。

第53図2：深鉢形土器の大形胸部破片である。口縁部に最大径を持つと思われるが、胸部も大きく膨らむ。胸部のくびれ部分にはコンパス文が2段配され、欠損している口縁部にも同文様が配されると思われる。地文は攢りの不良な単節R LとL Rで、横方向に回転施文して、ややくずれた羽状繩文を構成している。器面は内外面とも剥落が目立つ。色調は内外面共暗褐色～黒褐色である。

第53図3：推定口径36.2cmの深鉢形土器の大形破片である。胸部下半を欠損している。口縁部は内湾気味に開く。口唇はやや丸味を帯びる。口縁部文様帶はコンパス文が3段に、胸部のくびれ部分には半截竹管による不規則な平行沈線文が配される。地文は単節R LとL Rの附加条で、横方向に回転施文し、羽状繩文を構成している。内外面とも丁寧に調整されている。色調は外面がにぶい赤褐色～暗褐色、内面は明褐色で、焼成も良好である。

第53図4：推定口径25.2cmの深鉢形土器の破片である。口縁は内湾気味に開き、口唇は丸味を持つ。胸部以下はわずかに膨らんで底部へ移行するとみられる。地文は全て単節R L、L Rの附加条で、横方向に回転施文し、羽状繩文を構成する。内外面とも剥落が目立つ。色調は内外面共暗褐色～黒褐色である。

第53図5：深鉢形土器の大形破片で、推定口径30.8cmである。口縁部は内湾気味に開き、若干外反する口唇へ移行する。地文は単節R L及びL Rが、全面にわたって横方向に回転施文される。内外面とも丁寧に調整される。色調は外面は暗褐色黒褐色、内面は明褐色～にぶい橙色である。

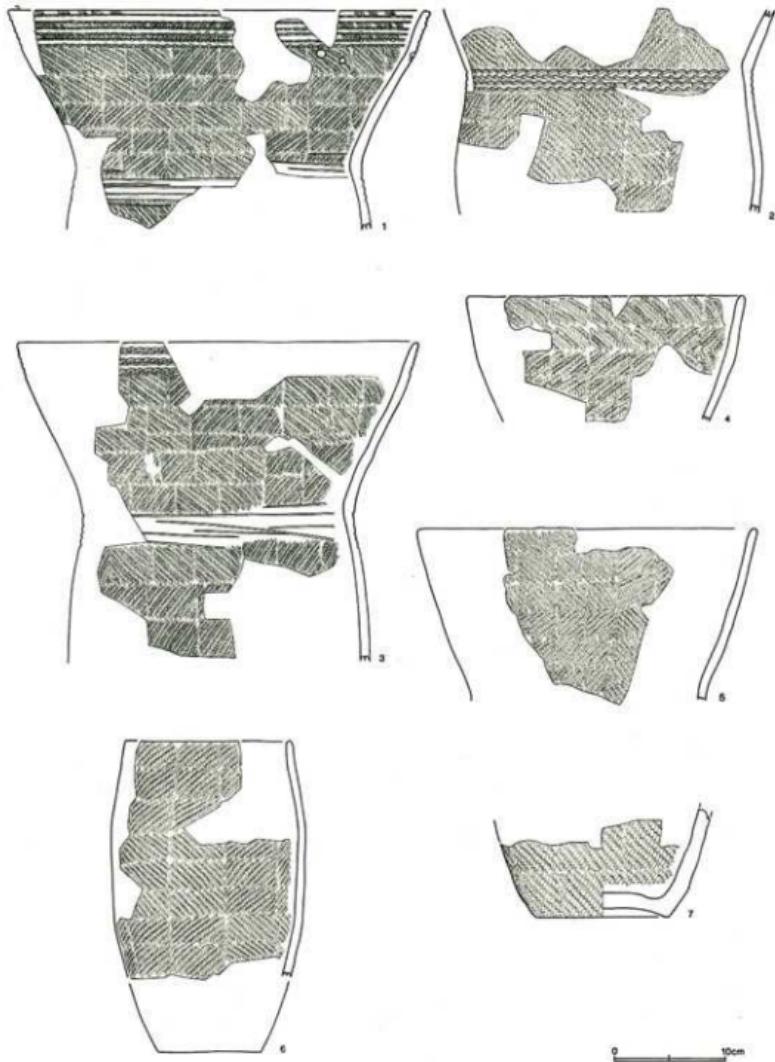
第53図6：推定口径15.2cm、推定胴径17.6cmの深鉢である。口縁部の大半と胴下半を欠損している。口唇部は内湾し、やや直立気味の口唇へ移行する。地文は全て繩文で単節R L及びL Rが横方向に回転施文される。器面は剥落が著しい。胎土には砂粒が多量に含まれる。色調は外面がにぶい橙色～暗褐色、内面は明褐色～灰褐色である。

第53図7：底径12.0cmの深鉢の底部破片である。上げ底で、内湾ぎみに開いて胸部へ移行する。輪積痕は明瞭で、この破片は輪積み部で剝離している。地文は単節R Lを横方向に回転施文している。器面は剥落が著しいが、底面は良く磨かれている。色調は内外面共にぶい黄褐色を呈する。

第54図8：底径10.3cmの深鉢破片で、口縁部及び胸部上半を欠損する。底部は上げ底を呈し、ほぼ直線的に外傾して胸部へ移行する。輪積み痕は明瞭である。地文は単節R L及びL Rを横方向に回転施文し、羽状繩文を構成する。原体は2種類使用され、器面は内外面とも丁寧に調整されている。色調は外面は橙色～明赤褐色、内面は黒褐色である。

第54図9：底径10.7cmの深鉢底部破片である。上げ底を呈し、直線的に立ち上がり胸部へ移行する。地文は単節R L及びL Rが横方向に回転施文され、羽状繩文を構成する。器面は内外面とも剥落が著しいが、底面は丁寧に磨かれている。胎土は砂粒を多量に含む。色調は外面はにぶい赤褐色、内面は明褐色黒褐色である。

第54図10：底径13.2cmの深鉢破片で、胸部上半及び口縁を欠損している。上げ底を呈し、内湾ぎみに立ち上がって胸部へ移行する。地文は無節Lを横方向に回転施文している。器面の剥落は著しい。胎土は砂粒を含む。色調は内外面ともにぶい黄褐色～黒褐色である。



第53图 第7号住居跡出土土器実測図(1)



第54図 第7号住居跡出土土器実測図(2)

第1類（第55図1～23、第56図51、第57図84） 1～11は平行沈線文で鋸歯文モチーフを構成するものである。9は口縁部の破片で外反する。他は胴部上半の破片である。12～19は平行沈線文のみで文様構成するが、上記の土器群と同一の可能性は大である。19は深鉢口縁部の破片で大きく外反する。他は胴部上半の破片である。20～23は集合沈線文によって文様帯を構成している。いずれも胴部上半の破片である。51は擦痕風の浅い平行沈線文である。

第2類（第56図42～47、49～50） 42、47は口縁部破片で、42は大きく外反し、47は内湾気味に立ち上がる。他は胴部の破片である。地文は41～44、49は附加条、50は無節R、45、47は単節LR、46は単節RLをそれぞれ横方向に回転施文している。

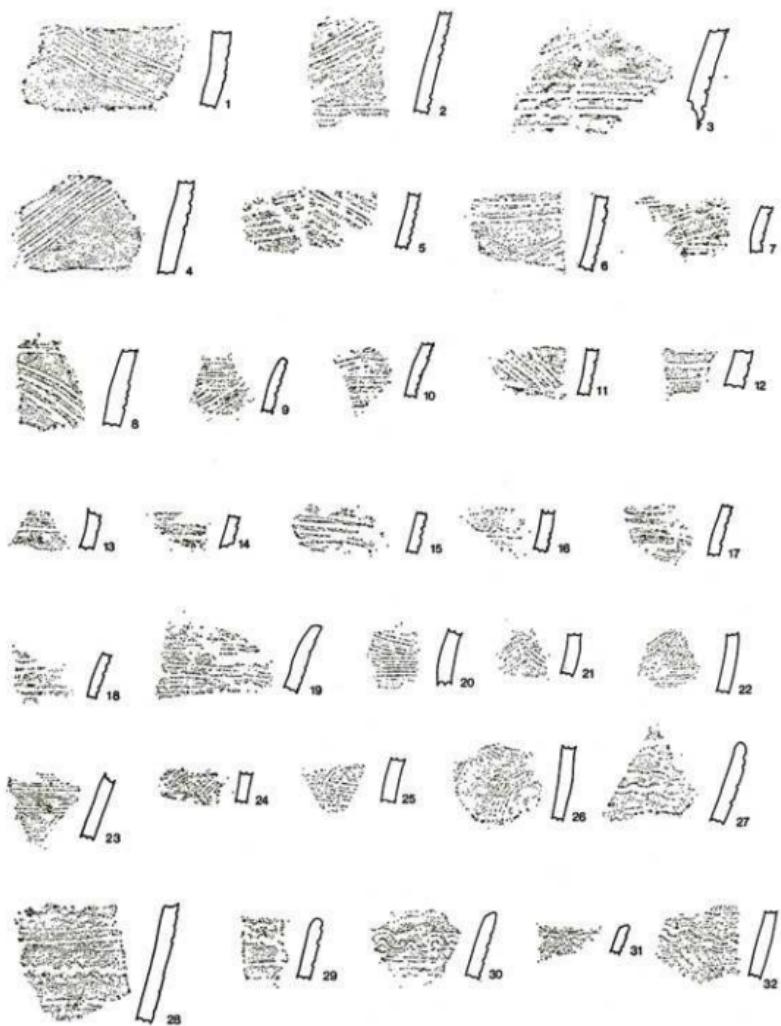
第3類（第55図24～31、第56図33、48、第58図85、86） 24～26、85、86は集合沈線文によって文様構成されるもので、24、25は複雑であるが、基本的にはコンパス文と平行沈線文の組合せである。いずれも胴部上半の破片である。27～29は連続波状文であるが、28、29はコンパス文のくずれたタイプである。27、29は口縁部の破片で、27は内湾し、29は直線的に立ち上がる。30、31は33口縁部の破片で、30、31は外反して立ち上がる。33は爪形文、平行沈線文と組合されるもので内湾気味に立ち上がる。

第4類（第55図32、第56図37～41） 37、38、40は口縁部の破片で、いずれも内湾気味に立ち上がる。他は胴部上半の破片である。37は口縁部に突起を持ち、独立した4単位が配される（推定）。地文は37は単節RL、40はLR、32は無節R、38、39は各々RL、LRの附加条でそれぞれ横方向に回転施文している。

第5類（第56図34～36） いずれも胴部上半の破片で、34、35は文様帯を上下段に分けて施文するもの。36は平行沈線文内に爪形文を施文し、下段は有節の平行沈線文が施文される。

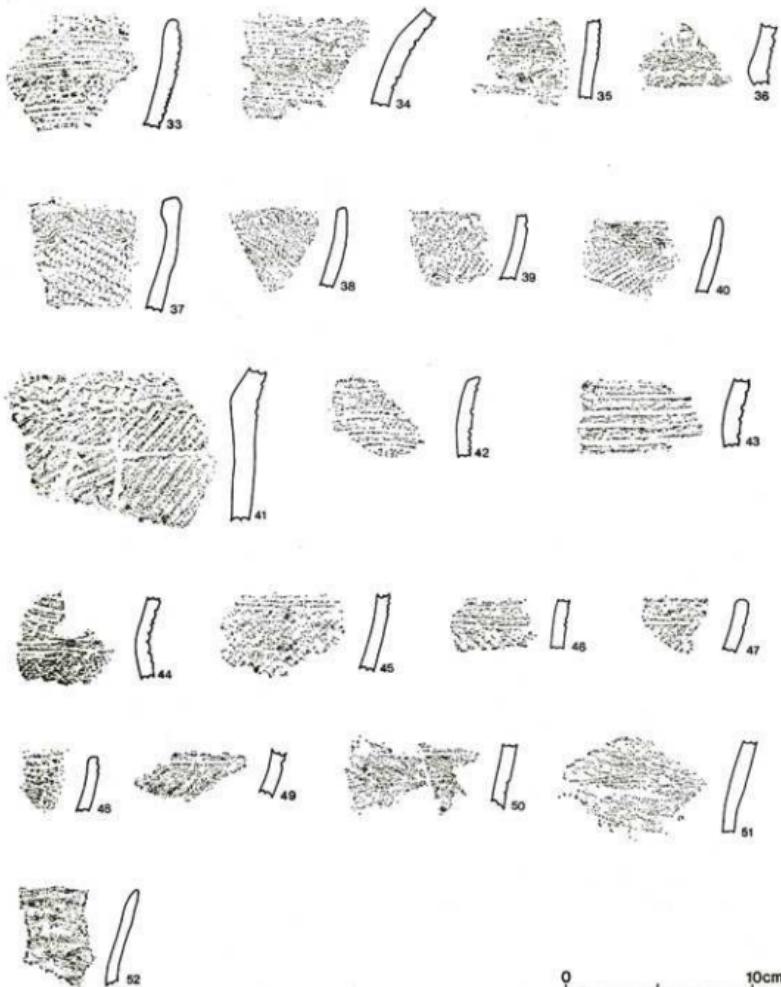
第7類（第56図52、第57図53～61、64、66、68、69、72～74） 52は無文の深鉢の口縁部破片である。54～56、58、61～66は口縁部の破片で、他は胴部上半の破片である。地文は53、61は単節RL、54、57、59、60は単節LR、55、72～74は附加条、56、66、68、69は単節RL、LRを各々横方向に回転施文している。

第8類（第57図62、63、65、67、70、71） 62、65は口縁部の破片である。62は大きく外反する深鉢であるが、65は胴部中央から内湾する浅鉢形の土器である。他は胴部の破片である。地文はいずれも無節で、62、67はR、63はL、65、71、72はRとLで各々横方向に回転施文している。70、71は羽状繩文を構成している。



0 10cm

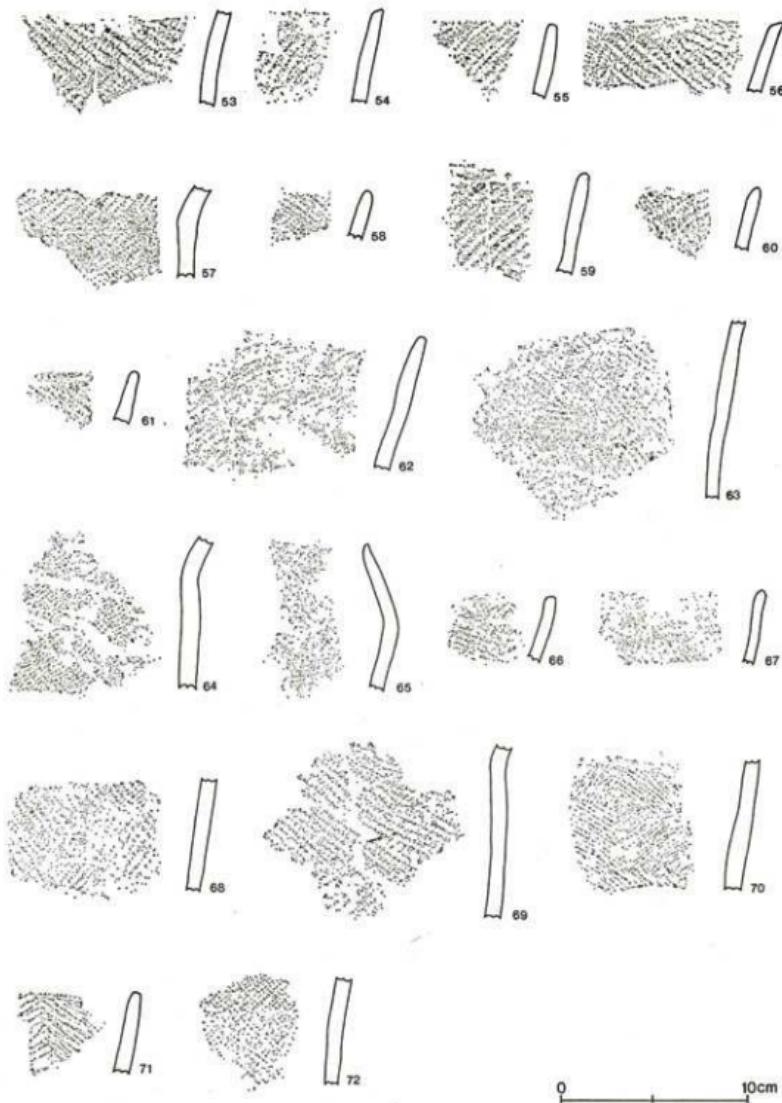
第55図 第7号住居跡出土土器拓影図 (1)



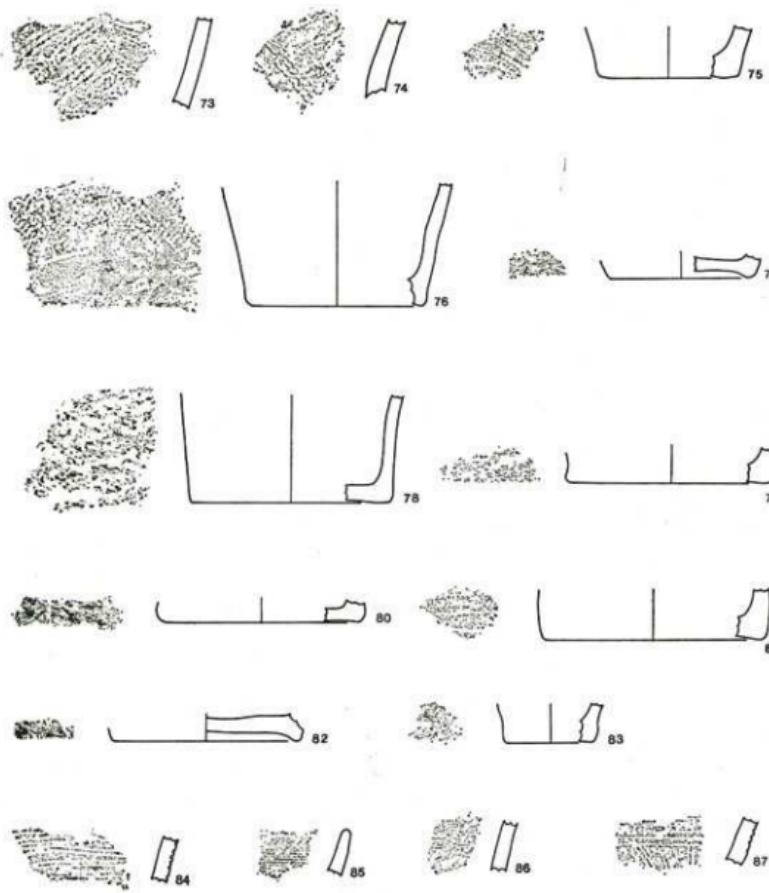
第56図 第7号住居跡出土土器拓影図(2)

第9類(第58図87) 半截竹管による平行沈線文を交差させて文様構成する深鉢の胸部上半の破片である。

第12類(第58図72~83) 胎土に繊維を含む底部小破片である。上げ底を呈し、75~80、82、83は外反気味に胸部へ移行する、81は内湾気味に立ち上がる。地文は75は単節R Lの附加条、76、78は単節R L、80、82は無節R、77、79、81、83は無節Lを横方向に回転施文している。(星間孝志)

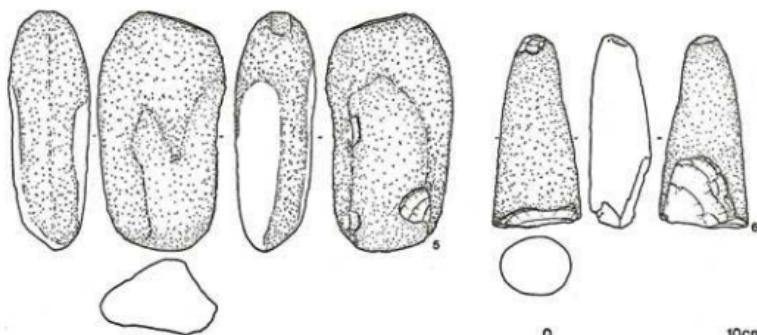
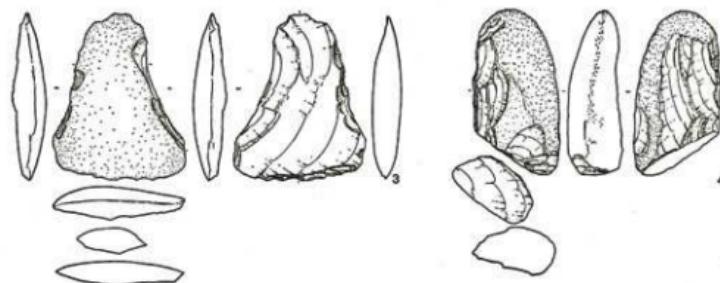
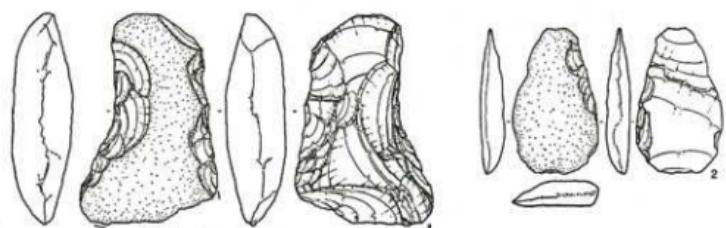


第57圖 第7號住居跡出土土器拓影圖(3)



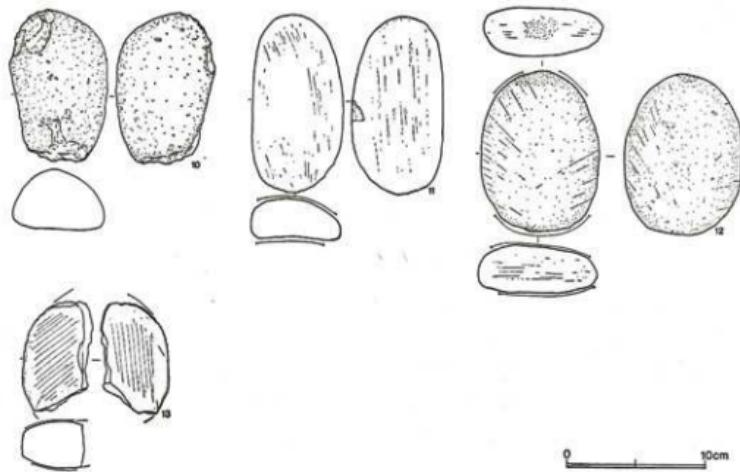
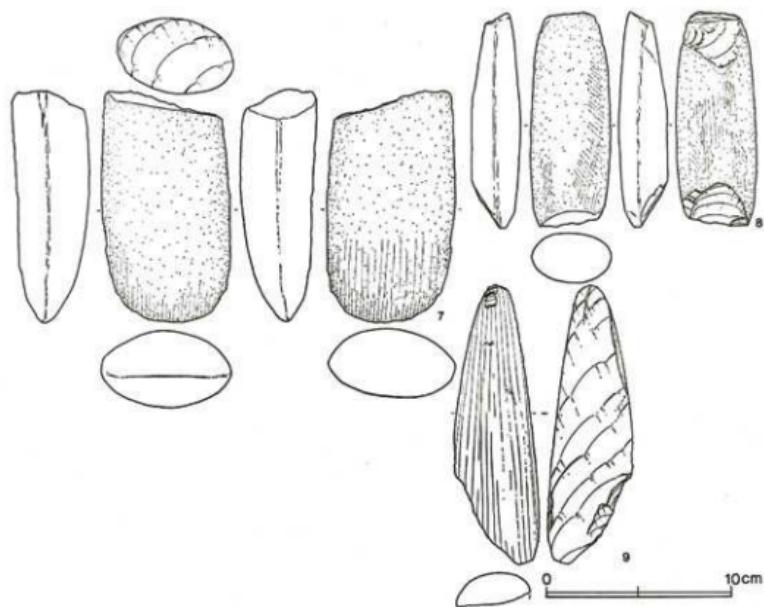
0 10cm

第58图 第7号住居跡出土土器拓影图(4)



0 10cm

第59图 第7号住居跡出土石器実測図(1)



第60図 第7号住居跡出土石器実測図(2)

石器（第59～60図） 本住居跡は第6号住居跡と切り合っており、第6号住居跡と同様に遺物量が多い。

打製石斧（1～3） 1は表面に自然面を残し、横広の剥片を素材としている。両側縁は浅い抉りが入っており、撥形石斧である。刃部は前からの打撃によって大きく欠損している。横断面を見るとかなり厚みがあり、調整加工は側縁から斜下に打ち下ろすようになっている。2は表面に自然面を大きく残した薄手の剥片を素材としている。調整加工は右側縁の縁辺のみしか施されておらず、刃部も素材作成の際の縁辺をそのまま利用している。3は表面に大きく自然面を残した、横広の剥片を素材としている。形状は基端より刃部にかけて広がる、撥形石斧である。調整加工は側縁だけにしか施されておらず、表面は右側、裏面は左側である。横断面を見ると平行四辺形になっている。刃部の調整加工は裏面に若干施されるのみで貧弱であった。刃を正面から見ると弱く表面側に湾曲している。

磨製石斧の未成品（4～7） 4は基部の中程で欠損している。表面の一部に自然面を残しているが、剝離による荒い調整を終え、敲打調整が行われていたと思われる。欠損面の縁辺に敲打痕があり、表面を見ると欠損面を打面にした剝離痕が見られる。この事は欠損した後で、たたき石として利用していた可能性が考えられる。5は拳大の河原石で、一部に自然面を残す以外は全体に敲打が行なわれている。未成品とするよりもたたき石とすべきかとも思われるが、一応ここに分類しておいた。6は全面に敲打が施されており、横断面はほぼ円形である。基礎面には自然面が残っており、表面に若干の剝離面が見られる。基部途中で欠損している。7は全面に敲打が施されている。刃部には磨痕が見られるが、意識的な研磨とも考えにくい、研磨を施さない状態でも使用していた可能性も考えられる。刃を正面から見るとほぼ中央で直線になっている。

磨製石斧（8、9） 8は両端を欠損しているため細部は不明である。9は基部の一部である。

たたき石（10） 拳大の河原石を利用し、長軸の両端を敲打している。

すり石（11～13） 11・12は扁平の礫の平坦面を使用している。13は縁辺を敲打している。

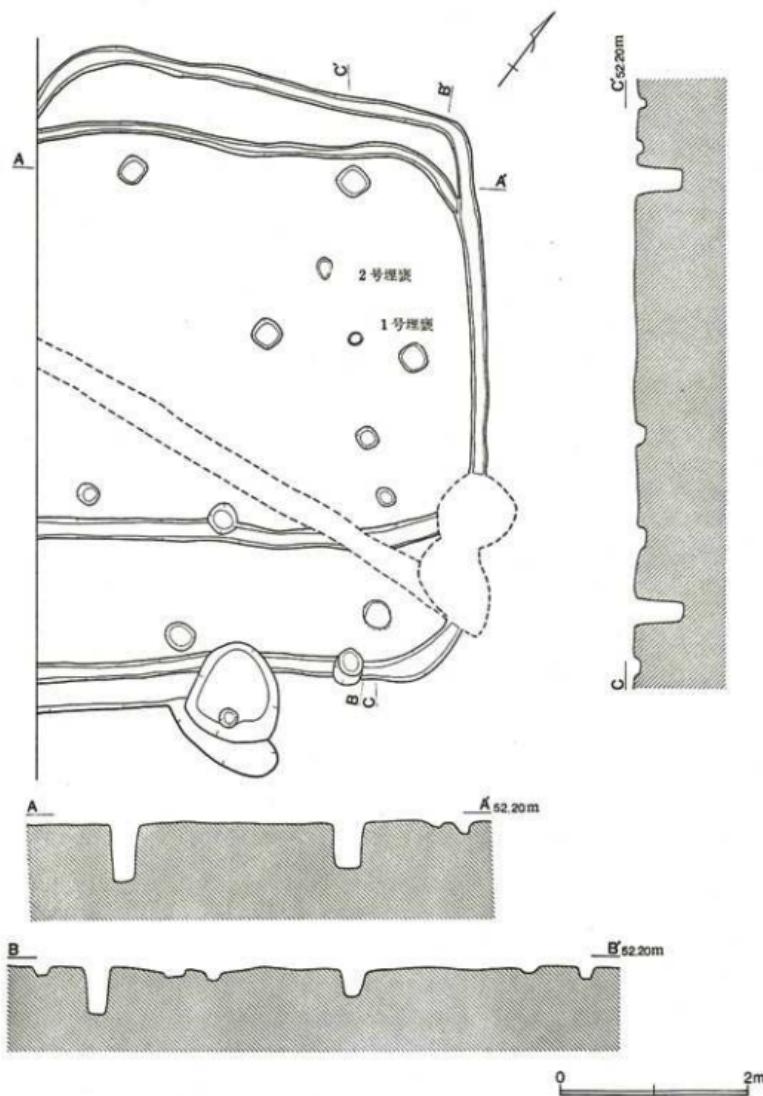
（西井幸雄）

### （8）三ヶ尻林遺跡第8号住居跡（第61図）

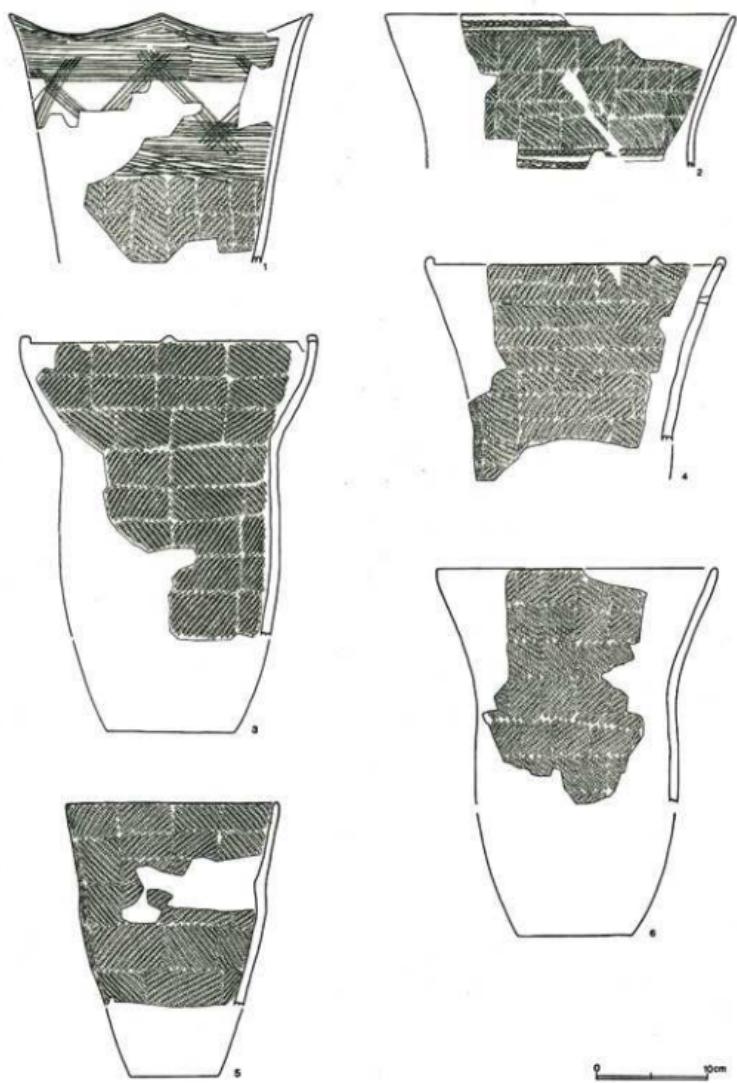
G-10・11、H-10・11グリッドに位置する。本住居跡は本遺跡の最西部に位置し、西側の隅は調査区外の為、プランの全容を確認することはできなかった。また、住居跡西側中央から東隅にかけて後世の溝によって攪乱を受けている。ほぼ台形に近い長方形プランを呈すると考えられ、長径6.15m×短径4.80m、南側のみ残った壁面の立ち上がりは10cm前後である。本住居跡は2度の拡張を行ったと考えられるが、壁面付近は第57号土壙（輿文）の構築によって周溝（壁溝）と壁面の一部が切られている。床面は全体に平坦である。炉址は検出されなかったが、埋甕が2個体検出された。いずれも口縁部及び胴部下半を欠くもので、床面にしっかりと埋設されている。ビットは10本検出され、5本は柱穴として使用されたものと考えられる。遺物は床面に近い位置で出土し、土器実測図9点を含む1,000点程の土器破片と石器約50点が出土している。

### 土器（第62～67図）

第62図1：推定口径27.3cmの深鉢である。口縁部は4単位の波状口縁で強く外反し、口唇は鋭角



第61図 第8号住居跡



第62図 第8号住居跡出土土器実測図(1)



第63図 第8号住居跡出土土器実測図(2)

に整形される。口縁部文様帶は半截竹管による平行沈線文によって文様構成される。口唇には平行して3~4本、口縁部及び胴部は8~10本の半截竹管による沈線で施文され、中央に4本1組の沈線による鋸歯状のモチーフが右~左へ施文される。文様帶下は単節RL、LRが横方向に回転施文され、羽状繩文を構成している。器面はやや剥落が目立つ。色調は外面は黄褐色~黒褐色、内面は明褐色である。

第62図2：推定口径31.6cmの深鉢の大形破片である。口縁部は内湾気味に立ち上がり、口唇は丸味を持つ。口縁部、胴部には各々2段にわたってコンパス文が施文される。地文は単節RL、LRの附加条で、横方向に回転施文される。やや剥落が目立つ。色調は内外面とも暗褐色~黒褐色である。

第62図3：推定口径26.8cmの深鉢。口縁部は内湾気味に立ち上がる。口唇は平坦に整形され、小突起が4単位配される。胴部はわずかに張る。地文は全面に単節RL、LRが横方向に回転施文されている。剥落が著しく、色調は外面が暗褐色~黒褐色、内面は明褐色である。

第62図4：推定口径27.3cmの深鉢の大形破片である。口縁部は強く外反する。口唇には若干内湾気味に小突起が4単位配される。地文は全面にやや不規則な羽状繩文が構成され、単節RL、LRを横方向に回転施文している。色調は外面が黒褐色、内面はにぼい暗褐色である。焼成は良好。

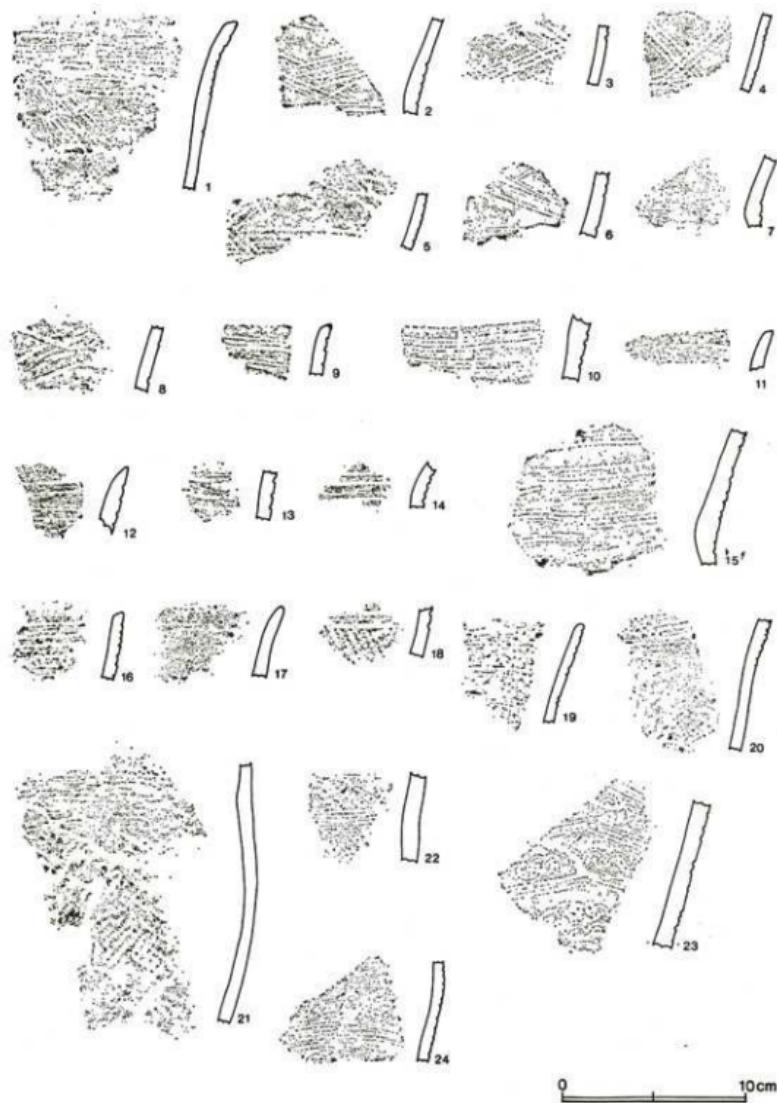
第62図5：推定口径19.3cmの小形の深鉢形土器である。口縁部は緩やかに外反し、口唇は丸く整形される。胴部はわずかに張る。地文は単節RL、LRで、横方向に回転施文し、羽状繩文を構成する。器面はやや剥落が目立つ。色調は外面はにぼい橙色~黒褐色、内面は明褐色である。

第62図6：推定口径25.4cmの深鉢大形破片である。口縁部は強く外反し、口唇でやや内湾する。口唇は丸く整形される。地文は単節RL、LRで、横方向に回転施文され、羽状繩文を構成する。色調は外面は灰黒褐色、内面は暗赤灰色~暗褐色で、焼成は良好である。

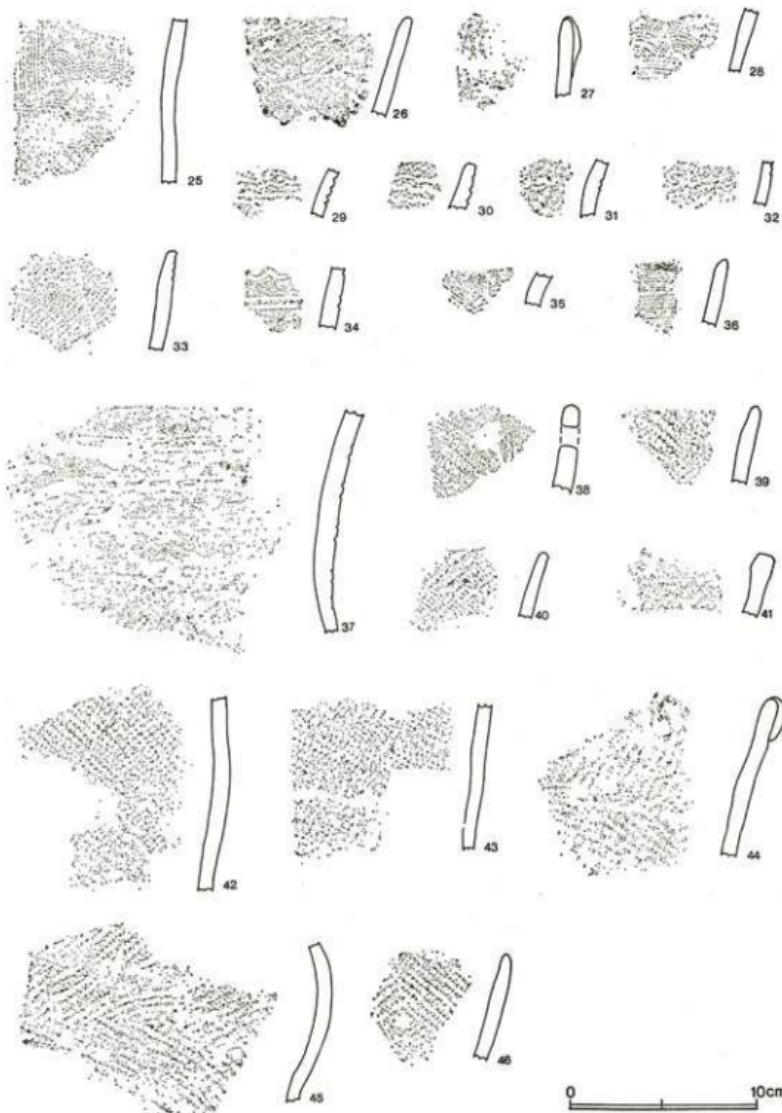
第63図7：推定口径28.5cmの浅鉢形土器の破片である。残存するのは口縁部付近で、口唇で内湾する。胴部は括れを持ち、下半は若干膨らむと思われる。地文は単節RL、LRで、横方向に回転施文される。色調は内外面とも灰褐色である。埋甃。

第63図8：深鉢の胴部破片である。地文は単節RL、LRで各々横方向に回転施文し、羽状繩文を構成する。色調は外面はにぼい橙~黒褐色、内面は暗褐色~黄褐色である。埋甃。

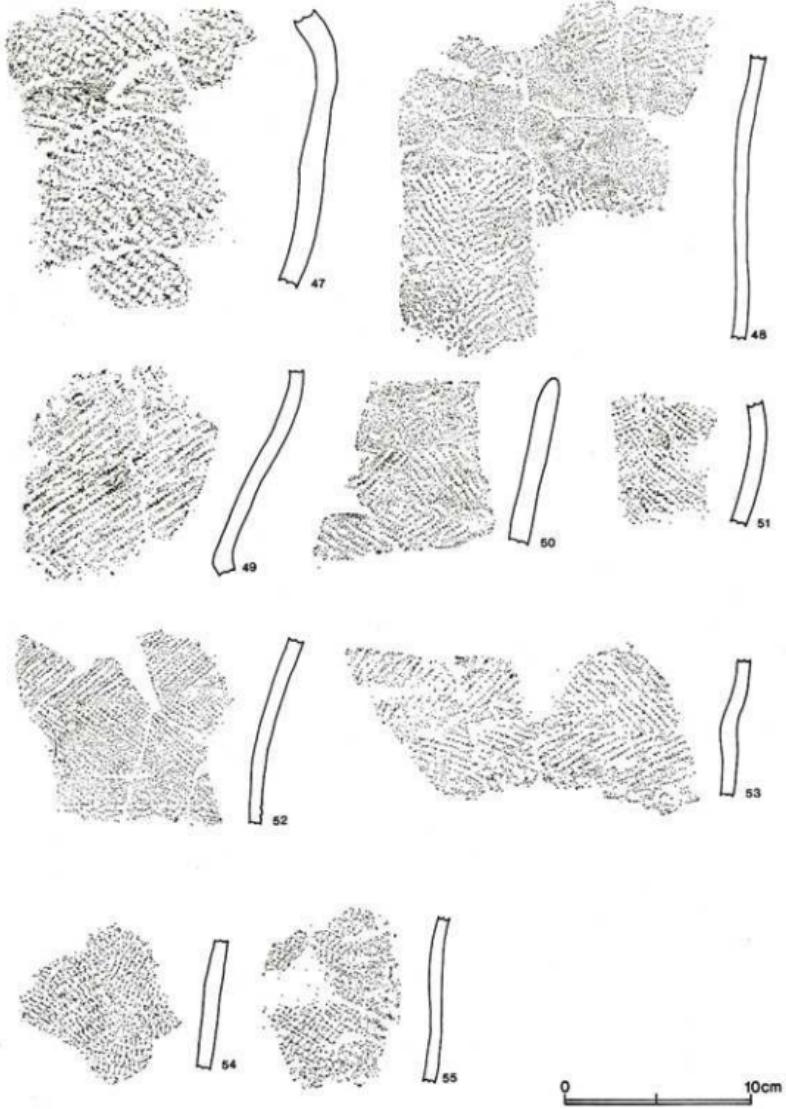
第63図9：底径13.4cmの無文の台付浅鉢の台部である。浅鉢は第5図2に類似すると考えられる。内外面とも丁寧に調整される。繊維含む。色調は内外面とも灰褐色~黒褐色である。



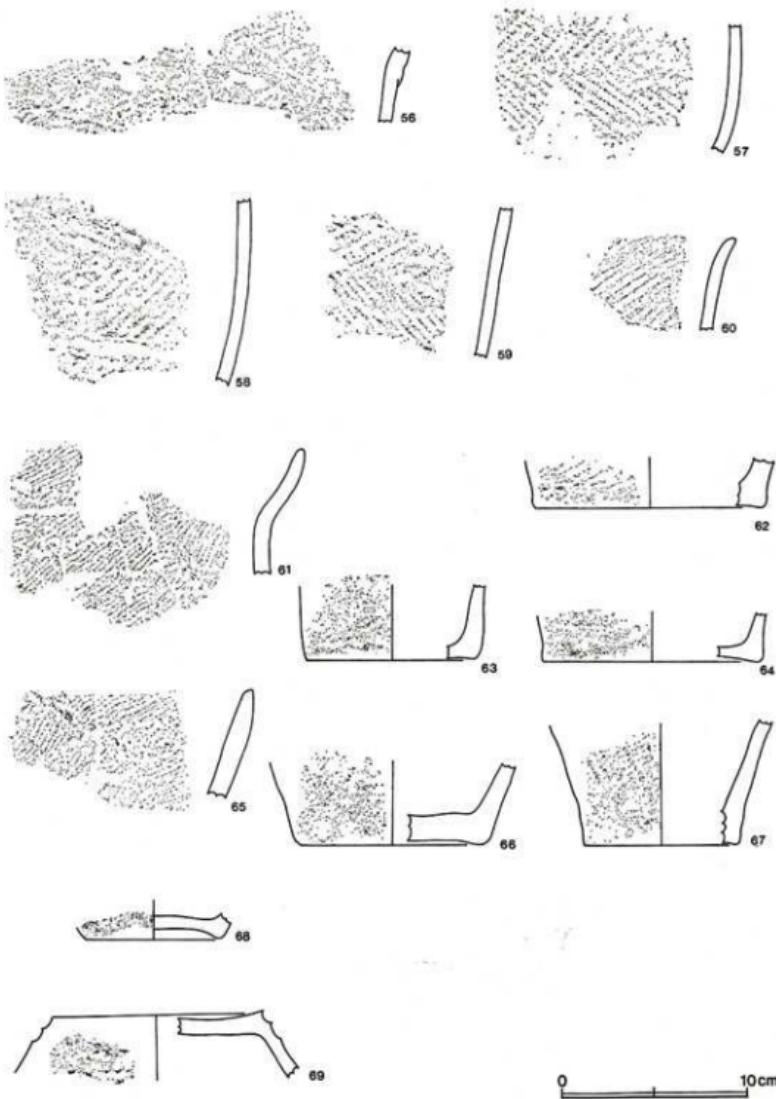
第64图 第8号住居跡出土土器拓影圖 (1)



第65图 第8号住居跡出土土器拓影图 (2)



第66図 第8号住居跡出土土器拓影図 (3)



第67図 第8号住居跡出土土器拓影図(4)

第1類（第64図1～16、第65図35、36） 1～8は口縁部文様帯に半截竹管による網文モチーフを上下に複合構成する。1は口縁部の破片で大きく外反する。口唇は平坦に整形される。他は胸部上半の破片である。9～15は横位の平行沈線文で文様構成される。9、11は口縁部の破片で9は口唇に連続する刻み列が施され、ともに外反する。他は胸部上半の破片である。35、36は集合沈線文である。

第2類（第64図17～22） 17、19は口縁部の破片で、19は孔を有しいずれも強く外反、口唇は丸く整形される。他は胸部の破片である。22は集合沈線文である。地文は17、19が無節R、他は単節RL、LRを横方向に回転施文し、羽状繩文を構成する。

第3類（第64図23～24） 胸部破片で、半截竹管による平行沈線文との組合せである。

第4類（第65図25～33） 27、30、33は口縁部の破片でいずれも外反する。27の口唇は丸く整形され、波状口縁の波頂には隆蒂が貼付される。他は胸部破片である。25～28は集合沈線文で、25は集合沈線によって文様の縦区画が構成される。地文は25、33はLR、26はRLの附加条、29～31は単節LR、32はRLで横方向に回転施文されている。

第5類（第65図34、37） いずれも胸部破片で、34はコンパス文との組合せで、37は半截竹管による平行沈線で文様区画をした後、爪形文が充填される。

第7類（第65図38～46、第66図47、49～52、54、55、第67図58、59） 38～41、44、46～50は深鉢口縁部の破片である。口縁部は38、46はやや内湾気味であるが、他は強く外反する。38、41、44は波状口縁を呈し、各々、補修孔、突起、隆蒂を口縁及び口唇に持つ。他は胸部の破片である。45、47は特異な器形を呈する鉢形土器である。地文は38、39、42、47はRL、40、41はLR、49、51、52、55は附加条、他はRL、LRを各々横方向に回転施文されている。

第8類（第66図48、53、第67図56、57、59～61、65） 60、61、65は口縁部の破片で、他は胸部破片である。地文は無節L又はRを横方向に回転施文し、口縁部破片を除き羽状繩文を構成する。

第12類（第67図62～64、66～69） いずれも纖維を含む。69は台付浅鉢の底部付近の破片で他は深鉢底部の破片である。いずれも上げ底を呈する。地文は62、64、66がL、68はR、63はLR、67はRL繩文で各々横方向に回転施文している。69は無文である。  
(星間 孝志)

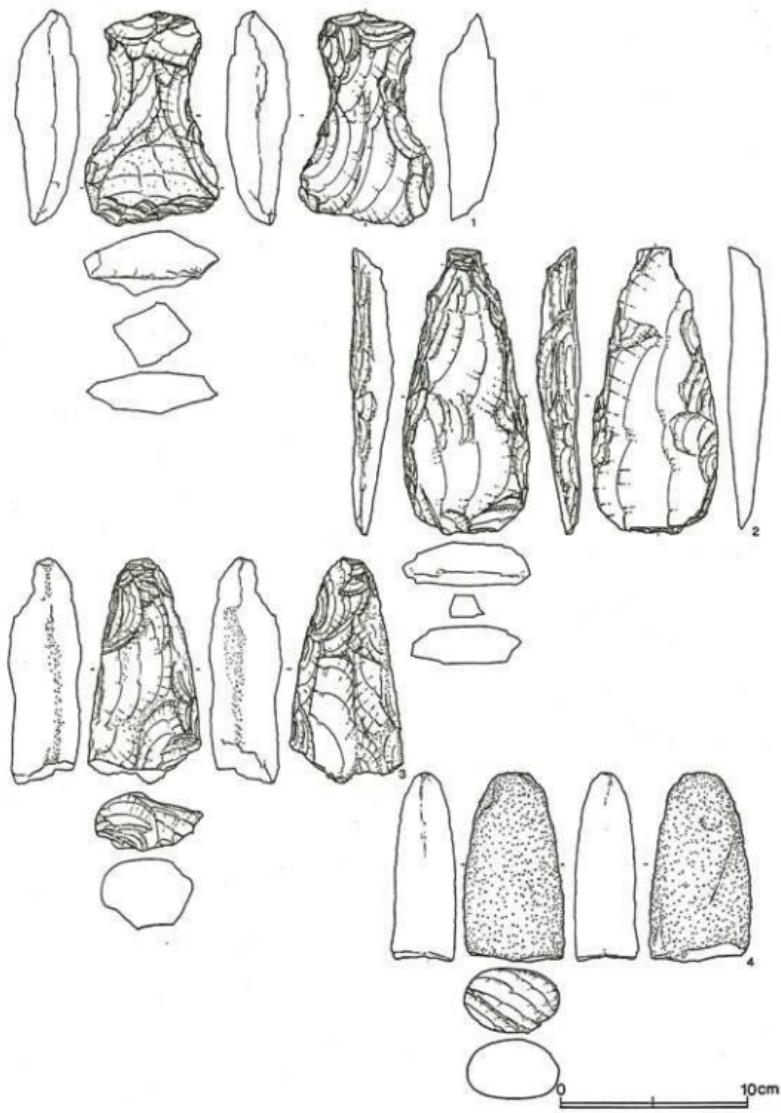
石器（第68～69図） 本住居跡は発掘区の西限に接して存在した。遺物量は平均的であった。

打製石斧（1・2） 1は横広で厚手の剣片を素材にしている。平面形状は左右対象であり、刃部調整は表面だけに施されている。2は横広の剣片を素材にし、周縁に急角度の剣離調整を施している。刃部調整は表面だけに施されており、刃を正面から見ると直線になっている。

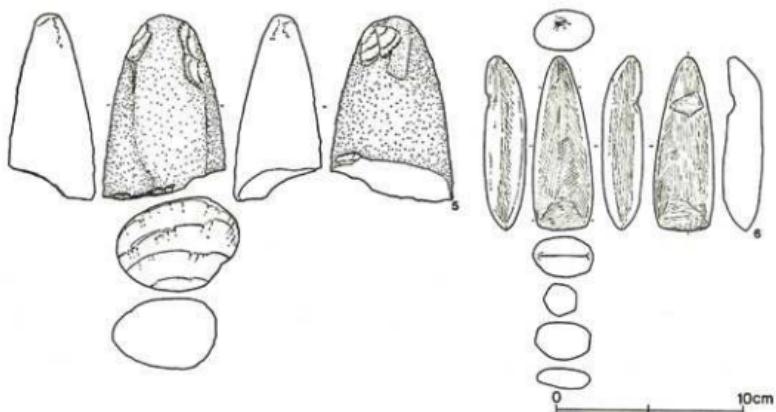
磨製石斧の未成品（3～5） 3は両面に多方向からの剣離を施し、横断面は円形状を呈している。調整加工は剣離加工の後に敲打が施されている。4・5は全面に敲打が施され、基部と思われる。

磨製石斧（6） 基端縁に敲打痕が見られる。基部の研磨方向を見ると、表面では刃縁に斜め方向に行ない、裏面では直角方向に行なっている。刃面は両面共に刃縁に平行方向で研磨しており、鏽が明瞭であった。刃を正面から見ると、ほぼ中央で直線である。

(西井 幸雄)



第68图 第8号住居跡出土石器実測図(1)



第69図 第8号住居跡出土石器実測図(2)

(9) 三ヶ尻林遺跡第9号住居跡(第70図)

D-9、10グリッドに位置する。本住居跡は第10号住居跡とともに遺跡の東に位置している。ほぼ方形のプランを呈する。長径5.30m×短径4.85m立ち上がりは20cm前後を測る。住居内の周溝(壁溝)は西側及び南側隅が残り、他は検出できなかった。炉址は検出できなかったが、南側隅付近くに埋甕が検出された。埋甕は深鉢の底部付近を除く、口縁部から胴部までが埋設されている。柱穴は5本検出された。床面はやや起伏があり、多量の礫が混入している。北西の壁面は風倒木痕によって切られ、多量の土器が混入していた。遺物は土器実測図5点を含む多量の土器破片と石器が出土地していっている。

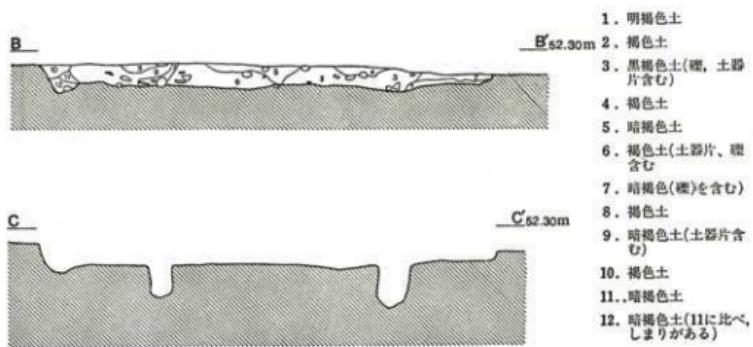
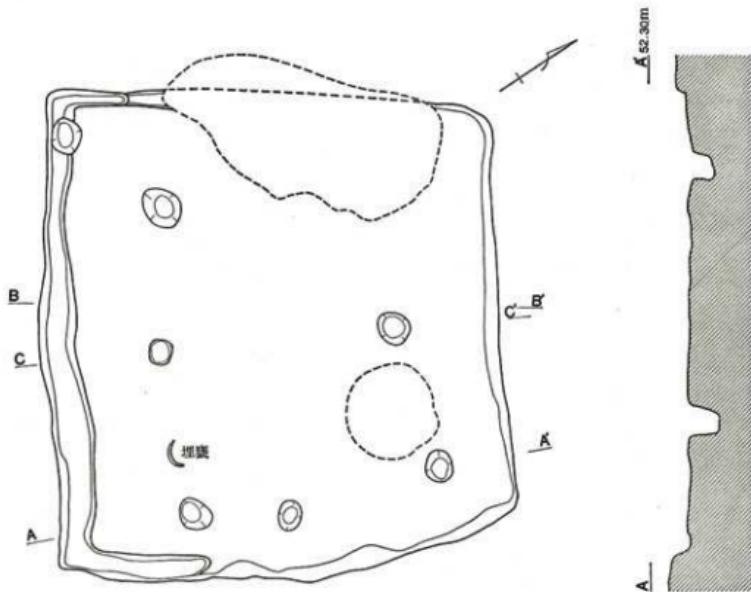
土器(第71~76図)

第71図1:推定口径43.2cmの深鉢。4単位の波状口縁を呈し、キャリバー状の立ち上がりを示す。主な文様帶は口縁部及び胴部の括れに2段にわたり、半截竹管によるコンパス文が施文される。文様間には単節RLとLRが横方向に回転施文され、羽状繩文を構成する。色調は外面が明褐～黒褐色、内面は暗褐色である。

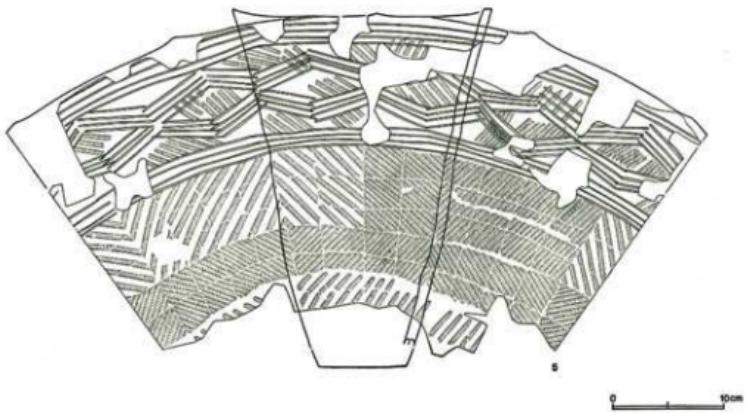
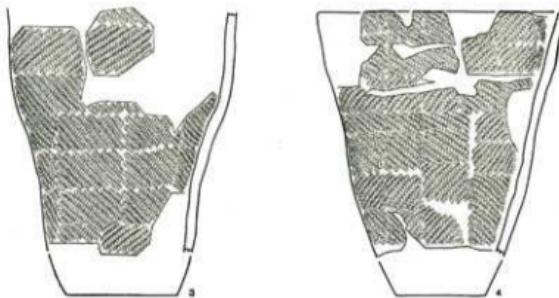
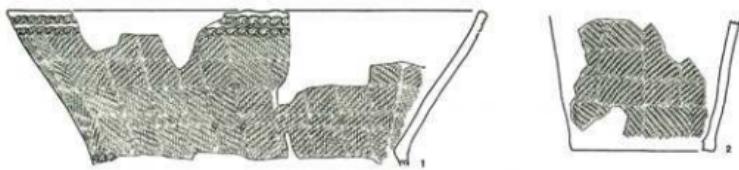
第71図2:深鉢の底部から胴部下半の大形破片である。底部は上部底状を呈すると考えられる。地文は全面に単節RL、LRが横方向に回転施文されて、羽状繩文となっている。器表面は剥落が著しい。色調は外面がにぶい橙色～淡黒褐色、内面は茶褐色である。

第71図3:深鉢形土器の胴部大形破片である。全面に単節RL及びLRが横方向に回転施文される。羽状繩文はやや退化的である。色調は外面はにぶい橙色～暗褐色、内面は淡赤褐色～黒褐色である。焼成は堅紙。

第71図4:推定口径22.3cmの深鉢である。胴部にわずかに括れを有し、やや内湾ぎみに立ち上がる。全面に繩文が配され、単節RLとLRが横方向に回転施文される。やや剥落が目立つ。色調は外面はにぶい赤褐色～淡黒褐色、内面は淡暗褐色である。



第70図 第9号住居跡



第71図 第9号住居跡出土土器実測図

第71図5：口径23.5cmの深鉢形土器である。底部を含む約30%を欠損する。長短の波頂部をもつ4単位(2単位)の波状口縁を呈し、口唇は平坦に整形される。胴部は中央でわずかに括れを持ち、口縁部へは直線的に外反する。口縁部文様帶は半截竹管の平行沈線文によって4本1組の沈線が上下段に施し、さらに上下に鋸歯状モチーフを複合施文して、6単位の菱形状の文様区画を構成している。地文は無節L、Rの附加条と無節RとLを各々横方向に回転施文している。色調は外面はにぶい赤褐色～黒褐色、内面はにぶい橙褐色～赤褐色～黒褐色である。焼成は堅紙である。埋甕。

第1類(第72図1～12、14～22、第73図24～47) 1～12、14～20、22、25～28、44～45は半截竹管の平行沈線文によって鋸歯状モチーフを基本に文様構成される。21、24、29～43は平行沈線文のみで文様構成されるが、破片である為、鋸歯状モチーフとの組合せも十分考えられる。46、47は平行沈線に渦巻状あるいは蘿手状の文様が施文される。3、11、12、14、15、19～21、29、35、39、45は口縁部の破片で、いずれも強く外反する。45は口唇に連続する刻み列が付加されている。他は胴部上半の破片である。

第2類(第72図13、23、第73図48～57、第74図58、59、60～63、第75図99) 51、53は口縁部の破片で51は内湾し、53は強く外反する。他は胴部上半の破片である。48は鋸歯状モチーフとコンバス文が組合わされている。地文は44、49、62、63は、50、54、58、59、61は単節LR、51～53、55～57、99は単節RLを横方向に回転施文されている。

第3類(第74図64～68) いずれも胴部上半の破片である。半截竹管の平行沈線文で上下に鋸歯状のモチーフをつくり、半截竹管の大きめのコンバス文を組合わせている。第6号住居跡例と類似すると考えられるが、コンバス文の施文パターンは明確ではない。

第5類(第74図60、69～76) 69はやや内湾、73は強外反する口縁部の破片である。他は胴部上半の破片である。爪形文は平行沈線間に等間隔で充填されるケースが殆んどである。76は平行沈線文の端にのみ施文される。71は鋸歯状のモチーフを構成すると考えられる。73はコンバス文との組合せである。また、60はLRの附加条、72はRLとLR、74はLRが横方向に回転施文されている。

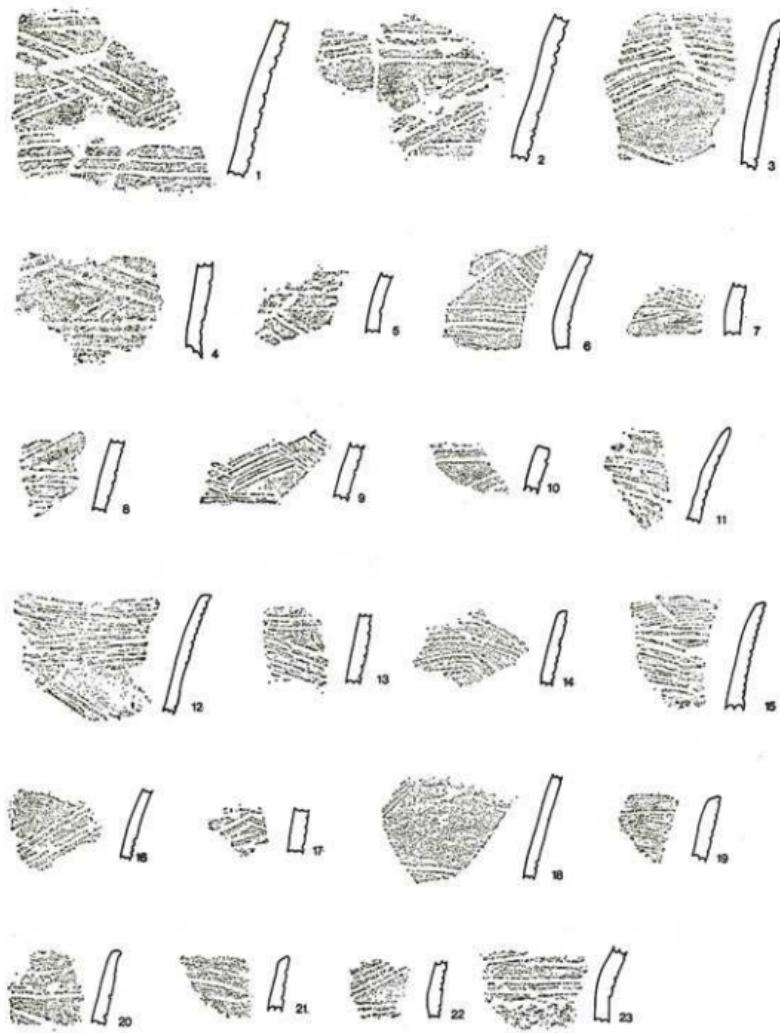
第7類(第74図77～83、第75図84～86、91～94、97) 80～83は口縁部の破片でいずれも外反する。口唇は丸味を持つ(81は口唇の一部剥落)。他は胴部の破片である。繩文原体は80、81、85はRL、78、82、83はLR、97はLRの附加条、79、84、91～94は単節RL及びLRで各々横方向に回転施文している。86はやや右上方向に単節RLを横方向に回転施文している。77は無文である。

第8類(第75図87～90、95、96、98) 87～90は口縁部の破片でいずれも外反し、88は口唇が平坦に整形されるが、他は少し丸味を持つ。他は胴部の破片である。87、89、90、95は無節L、88、98はR、96は無節RとLを横方向に各々回転施文される。

第9類(第75図100) 胴部の破片である。平行沈線で文様区画され、平行沈線間に繩文が施文され、他は磨消される。繩文後期。

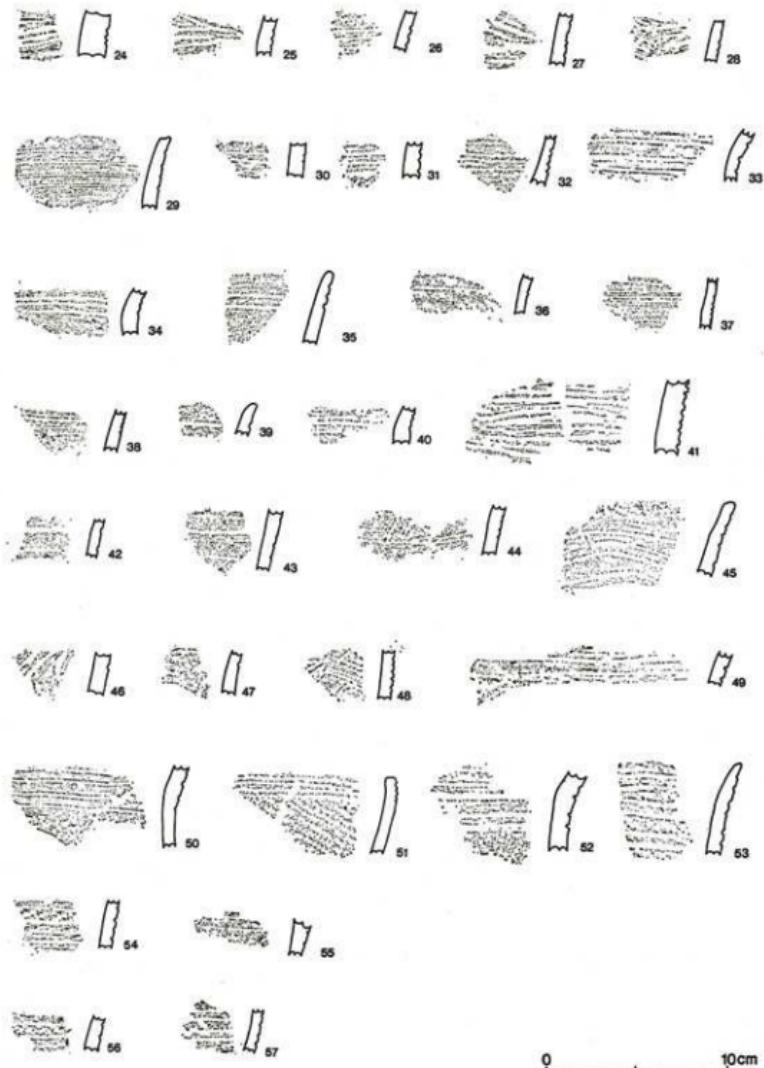
第12類(第76図101～106) いずれも上げ底を呈する深鉢底部の破片である。底部直上には105は附加条、104、106はRL、101、103は、102はRLとLRを各々横方向に回転施文される。

(星間 孝志)

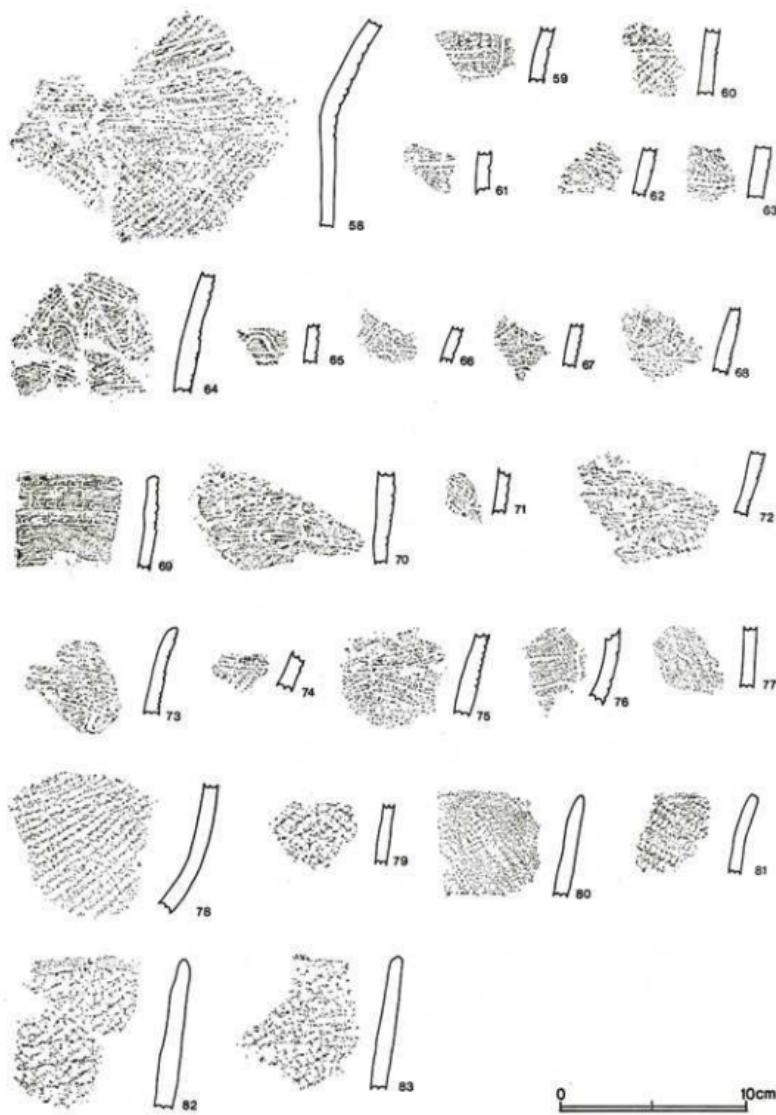


0 10cm

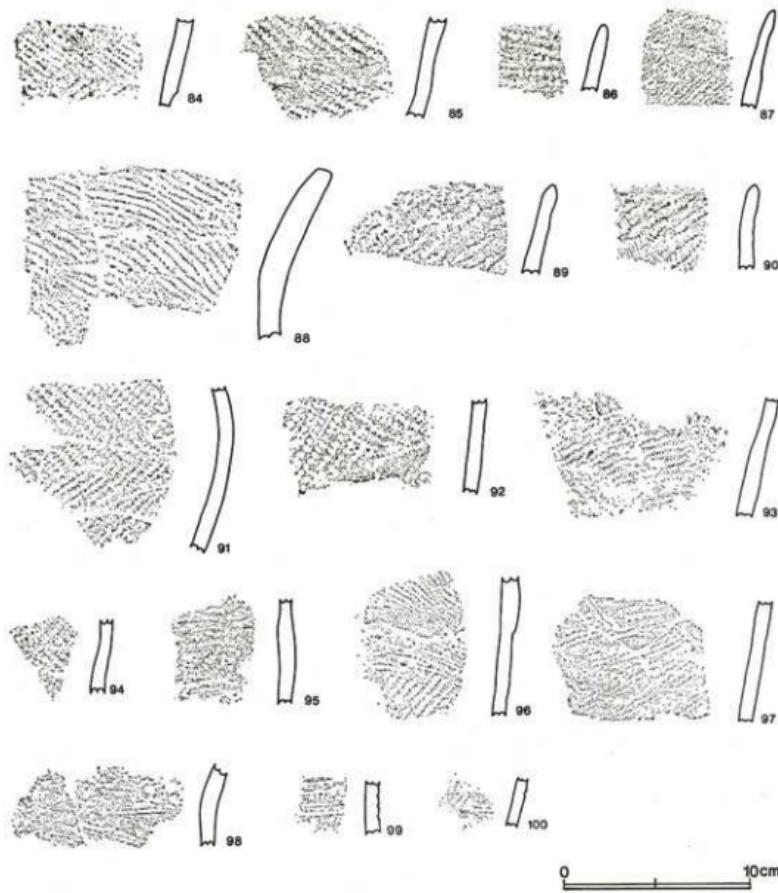
第72图 第9号住居跡出土土器拓影图 (1)



第73圖 第9號住居跡出土土器拓影圖 (2)



第74図 第9号住居跡出土土器拓影図(3)

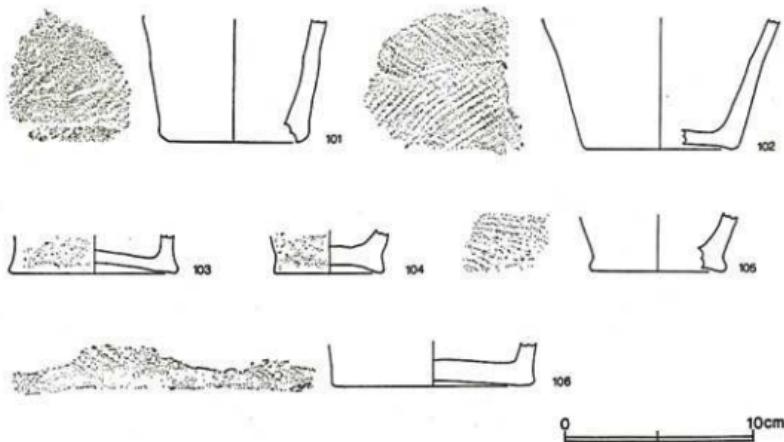


第75図 第9号住居跡出土土器拓影図(4)

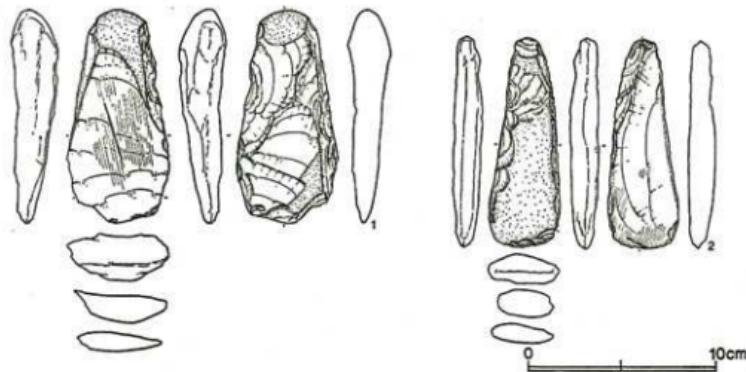
石器(第77、78図) 本住居跡は東側に第10号住居跡と接して存在し、遺物量は少ない。

打製石斧(1~3) 1は横広の剥片を素材とし、表面に自然面を大きく残している。調整加工は周縁に施してある。刃部の調整は表面だけに施され、前面から見ると直線である。刃部裏面に明顯な磨痕が見られた。2は両面基端と裏面に自然面を残しており、扁平の河原石を素材としたものと思われる。刃部表面は前方からの1回の剥離によって作られており、両側縁に調整加工が施されている。表面基部に刃縁に直角方向の磨痕が見られる。3は表面に自然面を残し、基端を欠損している。刃部は表面から裏面への急角度の調整が行われ、断面がL状になっている。

磨製石斧の未完成品(4) 全面に敲打調整が施されている。形状は磨製石斧として完成している



第76図 第9号住居跡出土土器拓影図(5)



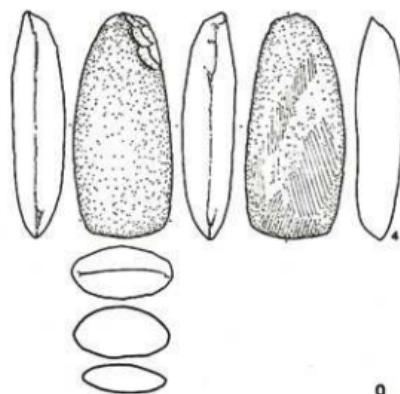
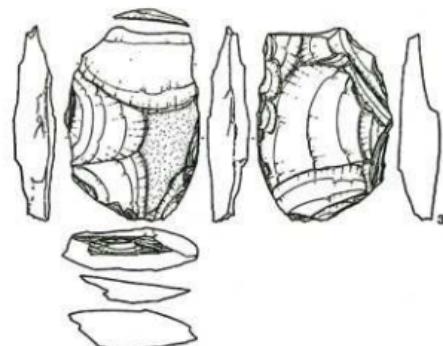
第77図 第9号住居跡出土石器実測図(1)

が研磨が施されていない事から未成品としておいた。

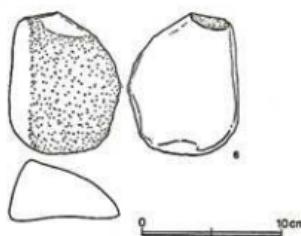
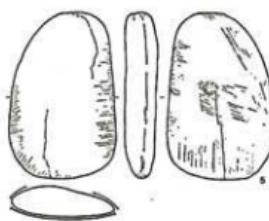
**すり石(5)** 楕円の扁平礫を使用している、短軸方向に磨痕が見られる。

**たき石(6)** 円礫の片面が敲打によってボロボロになっている。

(西井 幸雄)

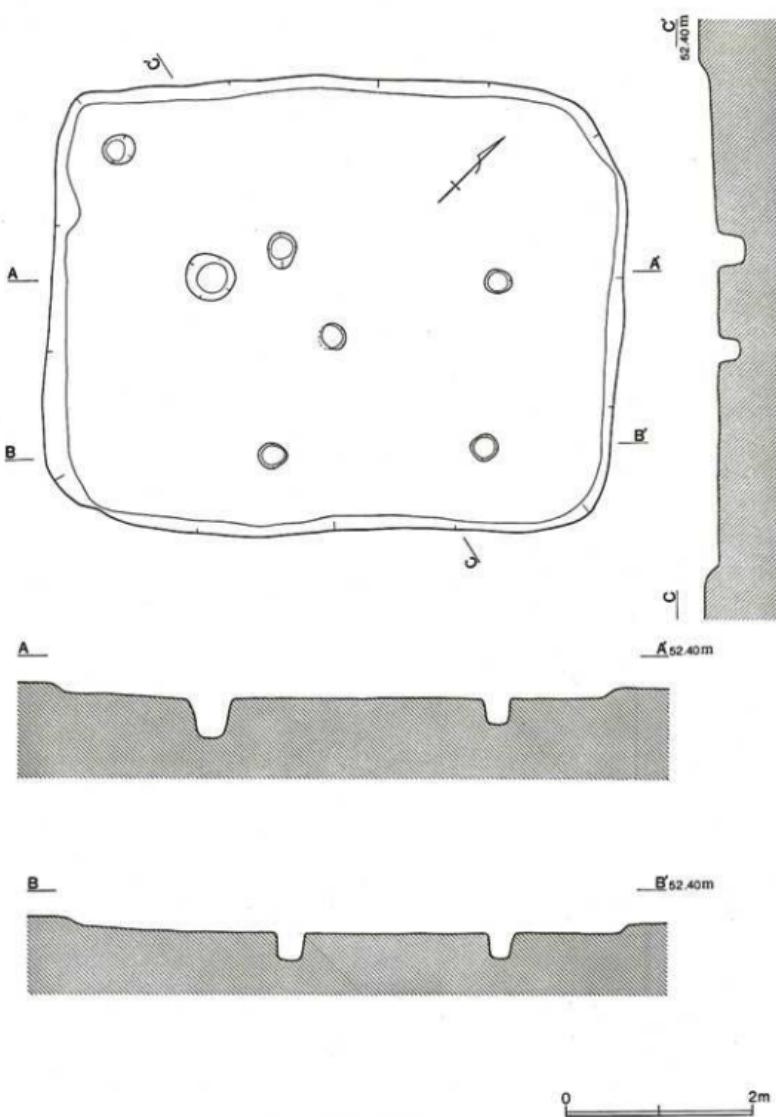


0 1 10cm



第78図 第9号住居跡出土石器実測図(2)

(10) 三ヶ尻林遺跡第10号住居跡（第79図）



第79図 第10号住居跡

R-11グリッドに位置する。第9号住居跡の南側にあって、ほぼ長方形のプランを呈する。長径6.10m×短径4.80m、立ち上がりは10cmを測る。本遺跡の中では全体によく残っている方であるが、壁面は若干掘りすぎた感がある。炉址及び埋甕等の施設は検出できなかった。柱穴は疊層を掘り込んで構築されており、7本検出された。床面は全体に平坦であるが、疊層が直下にせまっており、床面はあたかも敷石住居のごとくである。遺物は土器実測図1点を含む少量の土器破片と石器が出土した。

#### 土器（第80～82図）

第80図1：推定口径29.0cmの深鉢形土器の大形破片である。胴部上半に括れを持ち、口縁部は強く外反する。口唇は磨滅の為、若干丸味をもっているが、ほぼ平坦に整形されている。全面にわたって無節Lが横方向に回転施文されている。器面は全面にわたり、磨滅、剥落が進行している。輪積痕は比較的明瞭である。胎土には纖維と砂粒を含む。色調は外面が明褐色～淡黒褐色、内面は灰褐色～淡黒褐色である。

第1類（第81図1、3～6） 1は深鉢の口縁部の破片で、強く外反する。口唇は若干丸く整形され、半截竹管の刻み列が連続的に施文される。口縁部文様帶は半截竹管の平行沈線文で鋸齒状モチーフが5条1組で施文される。鋸齒状モチーフは胴部中央にも施文されると考えられ何単位かの複合鋸齒文モチーフを構成するものと見られる。他は胴上半の破片で、いずれも上記と同様鋸齒状モチーフが構成されると見られる。

第2類（第81図8） 胴部上半の破片である。地文は縄文が横方向に回転施文されている。

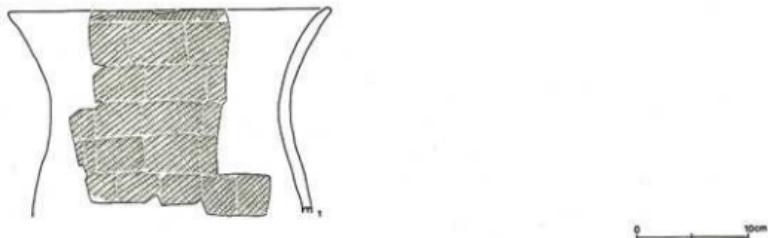
第5類（第81図2、7） いずれも胴部上半の破片で、2は半截竹管による鋸齒状モチーフと爪形文が組合わされている。C字爪形文は7も同様に平行沈線間に連続的に充填される。

第7類（第81図12、13） いずれも胴部破片である。単節R L及びL Rを横方向に回転施文している。

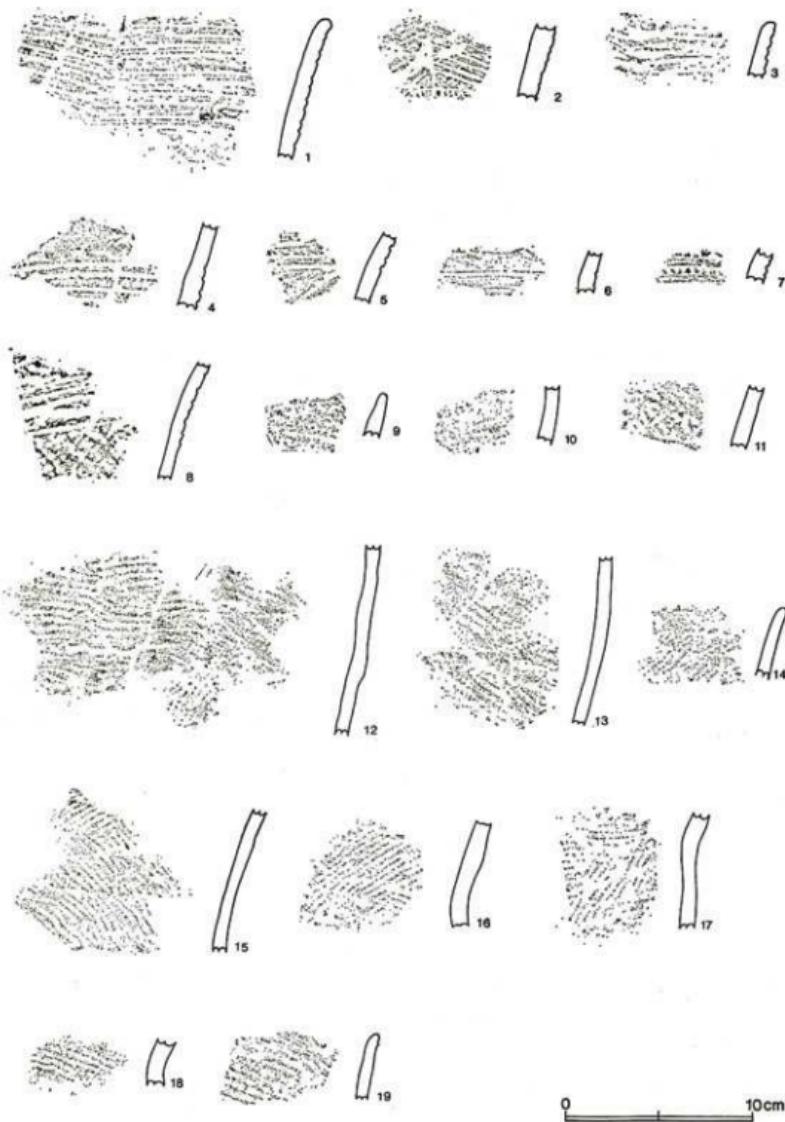
第7類（第81図9～11、14～19、第82図20～23） 9、14、20は口縁部の破片で強く外反する。20の口唇は平坦に整形されている。他は胴部の破片である。9、11、15、18、19はR、10、14、21、22はL、16、17、20は無節RとLを横方向に回転施文している。

第12類（第82図24） 上げ底を呈する底部の破片である。地文は単節R Lを横方向に回転施文している。

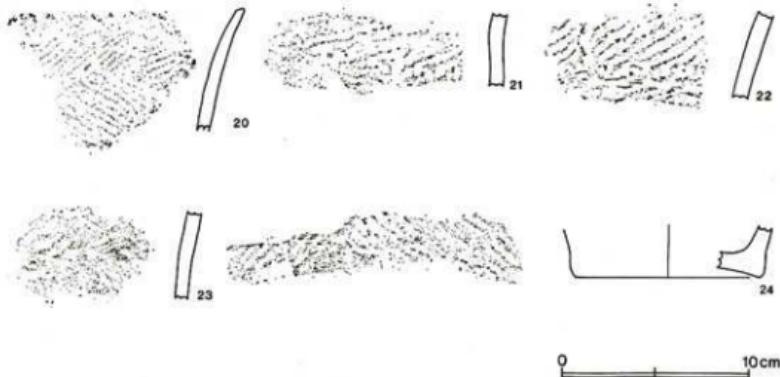
（星間 孝志）



第80図 第10号住居跡出土土器実測図



第81圖 第10號住居跡出土土器拓影圖 (1)



第82図 第10号住居跡出土土器拓影図(2)

石器(第83図) 本住居跡は第9号住居跡の東側に近接しており、遺物量は少ない。石器で実測可能なものは4点しかなく、その内容も貧弱であった。

1は打製石斧である。調整加工は周縁に荒く削離調整を施しただけである。基部の両面及び基端に自然面を大きく残しており、素材となった河原石が縦状跡であったと思われる。基部は表面左側が大きく欠損している。両面の自然面に磨痕が見られ、右側縁に若干の敲打痕が見られた。刃部は裏面からの調整だけで、表面は自然面の曲線を利用している。

2はすり石である。厚手の棒状の河原石を使用している。磨痕の方向を見ると、頭部では長軸に平行方向で入り、体部は表面では短軸に対し左斜め上から右下に入り、裏面では逆斜めに入っている。

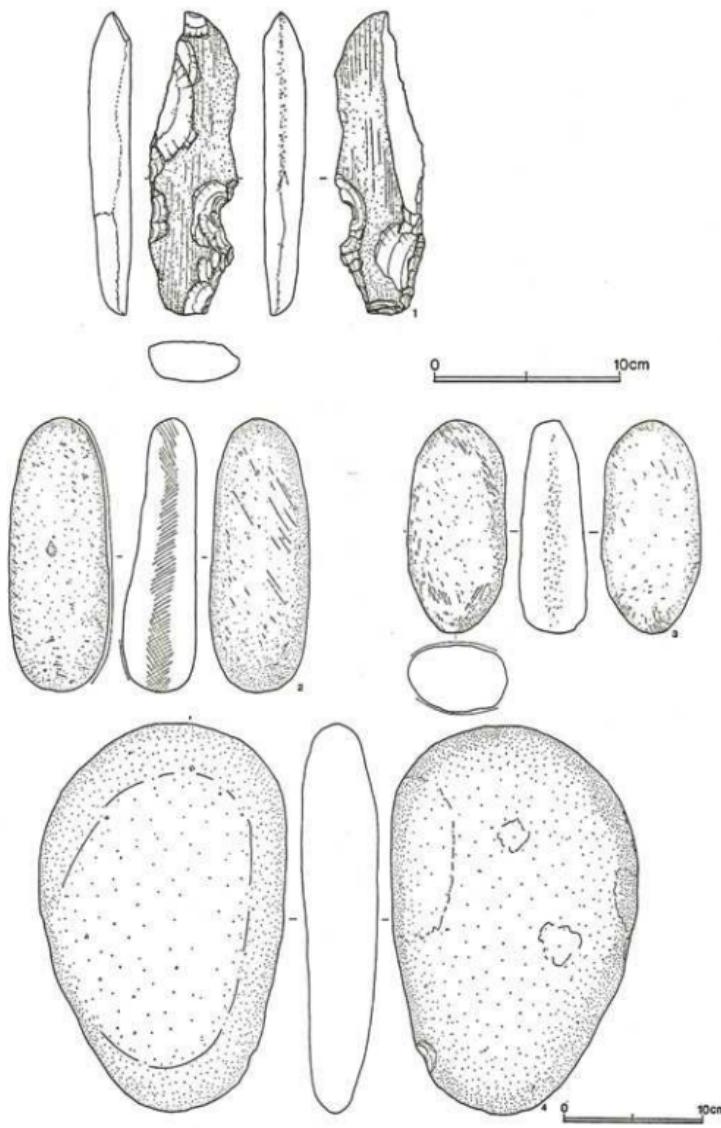
3はすり石である。厚手の河原石を使用している。両面平坦面に磨痕が見られ、その方向は表面では、左斜め上から右下に入り、左側縁は長軸に平行し、右側縁は平坦面とは逆に右上から左下に入っている。次に裏面を見ると体部では短軸に平行に入っている。右側縁に敲打痕が見られる。

4は石皿である。住居跡から石皿が検出されたのは、第1号住居跡からの4点と本住居跡だけである。椭円扁平の河原石をそのまま利用している。

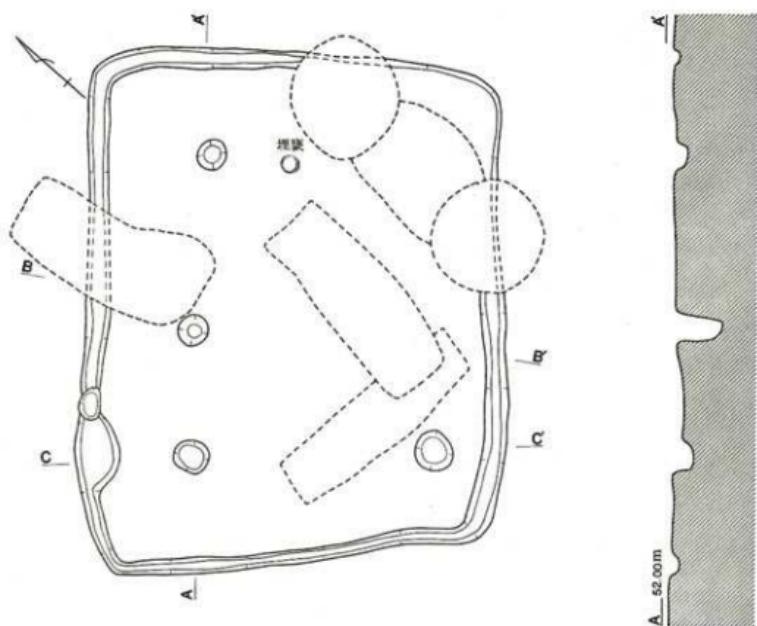
(西井 幸雄)

### (1) 三ヶ尻林遺跡第11号住居跡(第84図)

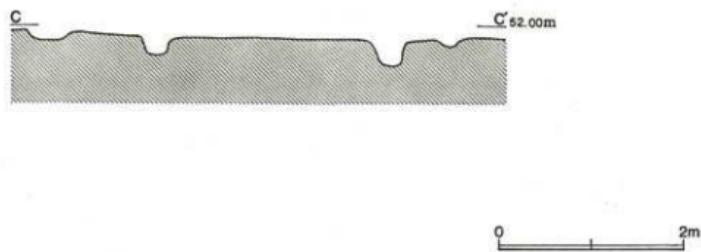
F-17、18グリッドに位置する。本住居跡は西辺を除く3辺が後世の擾乱によって切られている。プランは長方形に近い方形を呈し、長径5.60m×短径4.64m、立ち上がりは10cmを測る。南東隅付近で埋甕が検出された。土器は深鉢の胴部約1/4が埋設されていた。床面は全体に平坦である。は検出できなかった。柱穴は4本検出され、いずれもしっかりとした掘り込みを持ち、深さは25cm前後である。遺物は殆んど床面から検出されたもので、土器実測図2点を含む多量の土器破片と石器が出土した。本住居跡の所属時期は、第1号から第9号住居跡の出土土器に比べやや新しい土器様相が窺われ、黒浜期の最終段階に近い時期と考えられる。



第83图 第10号住居跡出土石器実測図



1, 暗褐色土, ローム粒子, 焼土粒子含み, しまりがある

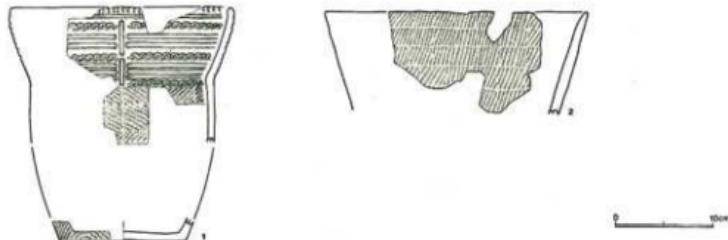


第84図 第11号住居跡

### 土器（第85～90図）

第85図1：推定口径23.3cm、推定底径13.0cmの深鉢土器である。口縁部は緩やかな波状口縁で内湾気味に外反する。口唇は丸く整形される。口唇直下は波頂部から右はC字、左はD字爪形文が等間隔で施文される。3条のコンパス文と縦の平行沈線+爪形文で区画された文様帶内には上段2条、下段3条の爪形文+平行沈線文で文様構成される。地文はRLとLR縞文で横方向に回転施文され、羽状縞文を構成する。底部はほぼ平底に近い上げ底である。色調は内外面とも明褐色である。埋甕。

第86図2：推定口径27.1cmの深鉢。口縁部の破片である。口縁部は直線的に外反し、口唇はシャープに整形される。地文は無節しがやや斜方向から横方向に回転施文されている。色調は外面が淡黒褐色、内面は明褐色～淡棕色である。焼成は堅緻である。



第85図 第11号住居跡出土土器実測図

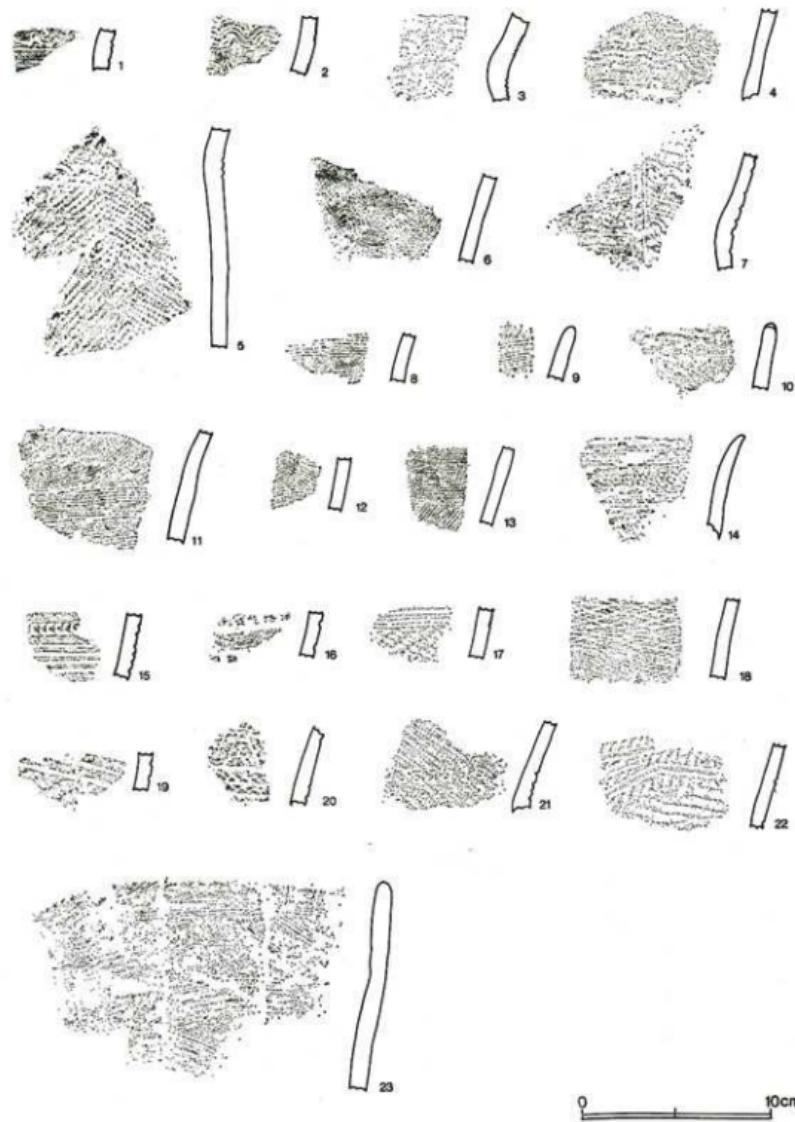
第1類（第86図8～13、23、第90図71、72） 9、10は口縁部の破片で、他は胴部上半の破片である。9～13は集合化した沈線文が施文され、12には鋸歯状モチーフがみられる。71は部分的に施文されている。23は外反する口縁部の破片で流水文風のモチーフと組合される。72は半截竹管による波状文との組合せである。

第2類（第86図14、17、19、20、22、第89図70） 胴部上半の破片である。19、22は半截竹管による鋸歯状モチーフが、20は平行沈線間に平行波状文が組合されている。地文は12はLR、14、19は無節L、20はR、22はRとLが横方向に回転施文されている。70は半截竹管による波状文との組合せで、地文は無節Rを横方向に回転施文している。

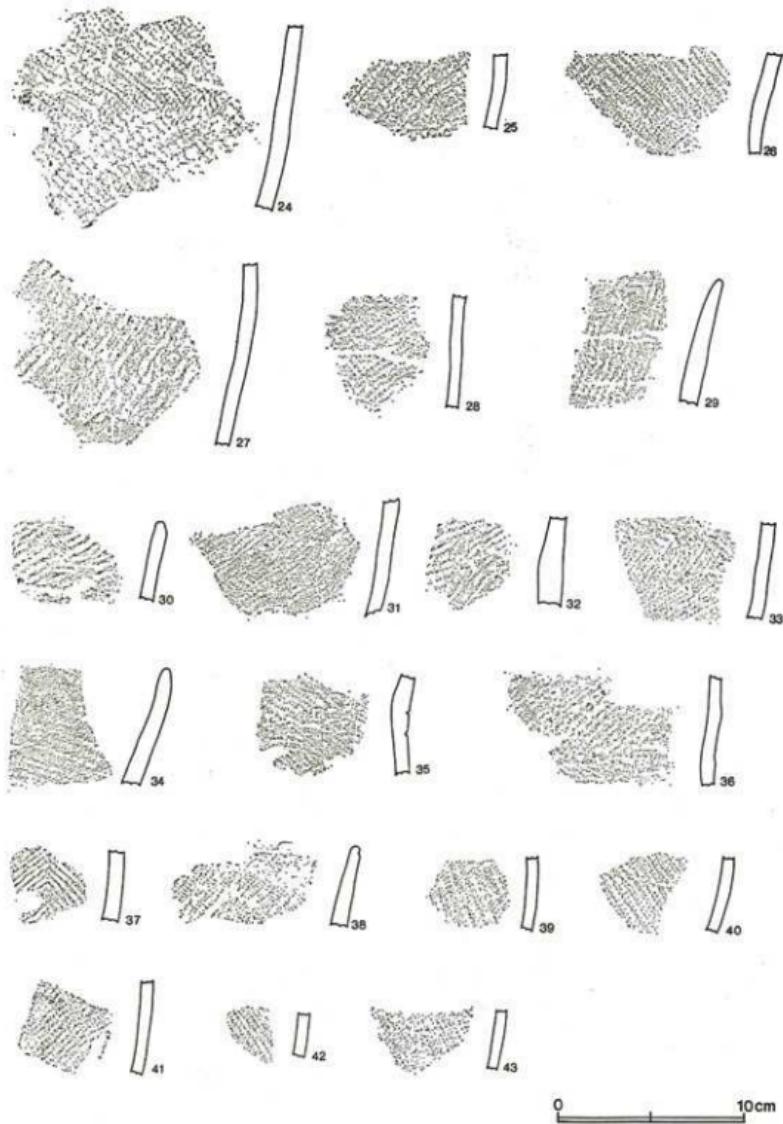
第3類（第86図1～4、6、7） 胴部上半の破片である。1、7は半截竹管の平行沈線文と組合される。2～4、6は集合化した沈線が施文される。

第4類（第86図4、第89図79、80、82～86） 83を除き、胴部上半の破片である。5の胴部のコンパス文は口縁部にも施文されるものである。79～86は半截竹管を平行沈線風に描き、有節化したコンパス文である。地文は83、86はRL、84はLR、5、85は単節RL、LRが横方向に回転施文されている。

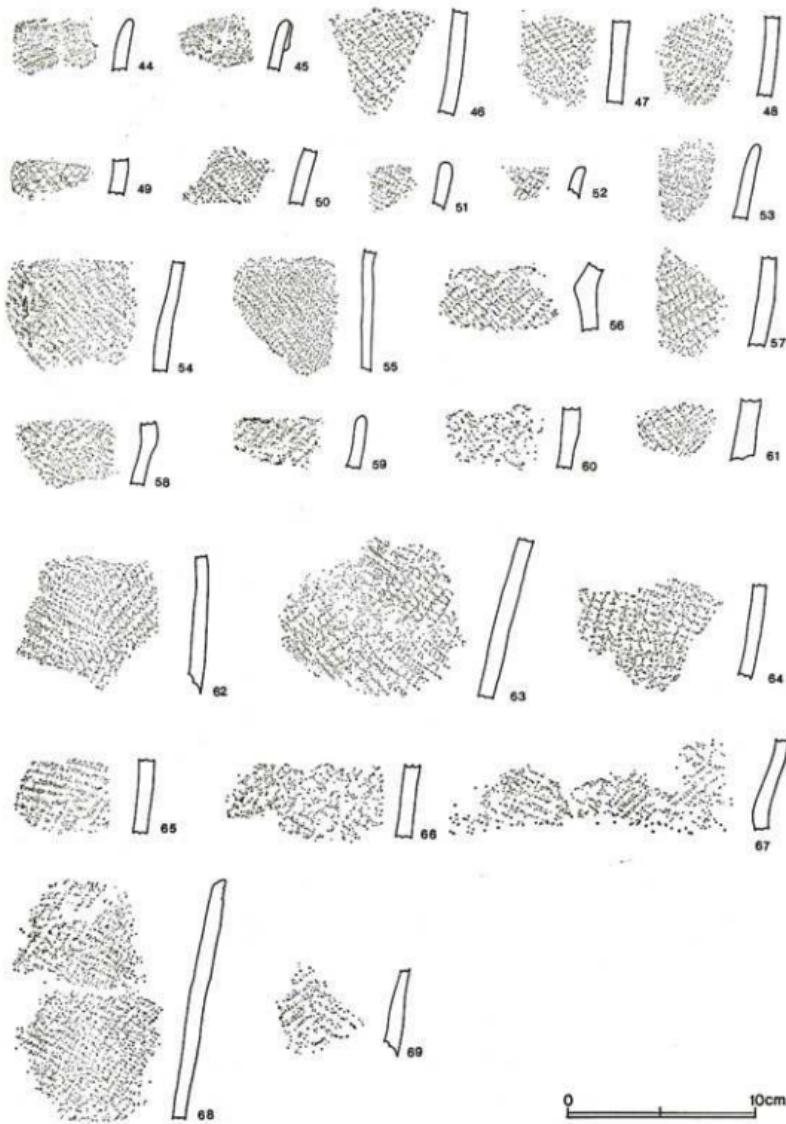
第5類（第86図15、16） 胴部上半の破片で、15は平行沈線文、16は爪形文による鋸歯状のモチーフを構成するものである。



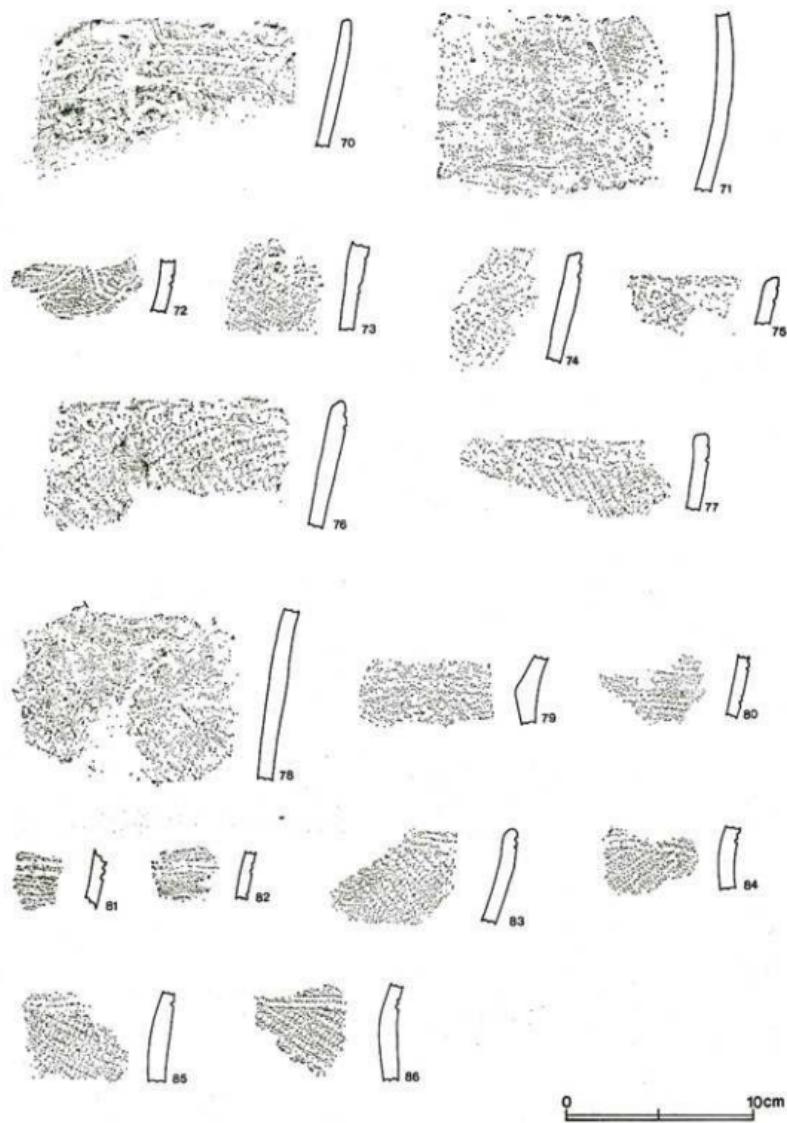
第86图 第11号住居跡出土土器拓影图 (1)



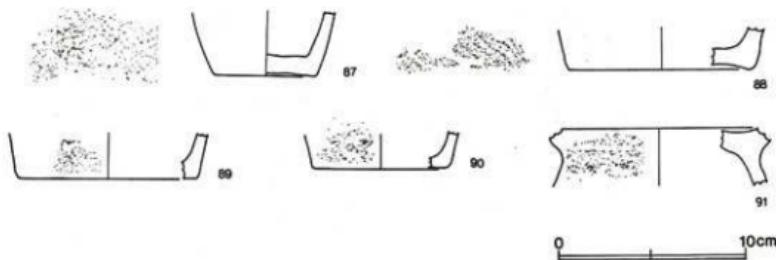
第87图 第11号住居跡出土土器拓影图 (2)



第88図 第11号住居跡出土土器拓影図(3)



第89图 第11号住居跡出土土器拓影图 (4)



第90図 第11号住居跡出土土器拓影図(5)

第6類（第89図73～78） 74～77は口縁部の破片で、77を除き同一個体と思われる。口縁直下には径1cmの円形刺突列が配される。73、78は胴上半の破片である。78の刺突列はやや小形で不規則である。地文は73は単節LR、77はRL、78はLとR、他はRL、LRが横方向に回転施文される。

第7類（第87図24～26、28、33、36、38、46～58、61～69） 24、26、48、62～69はRL、LR繩文を横方向に回転施文し、羽状繩文を構成している。61、67は附加条。25、28、36、38、56、57、58はLR、46、47、49～54は単節RLで横方向に回転施文される。51は波状口縁を呈する。

第8類（第87図27～37、44、45、59、60） 27～33、44、45、59、60はL、37はLとRを横方向に回転施文している。45は口縁に隆帯が巡る。

第9類（第87図39～43） 胸部破片である。41は単節LR、42はRLで横方向に回転施文される。

第12類（第90図87～91） 87～90は底部の破片で87、88は若干上げ底気味であるが、89、90は平底を呈すると思われる。底部直上の地文は88～90は単節RL、87はLRで横方向に回転施文されている。91は台付浅鉢の底部付近の破片で、括れ部分にコンパス文と繩文が施文されている。

（星間 孝志）

石器（第91図）本住居跡は東側に存在し、近くに第12号住居跡が見られた。遺物量は少ない。

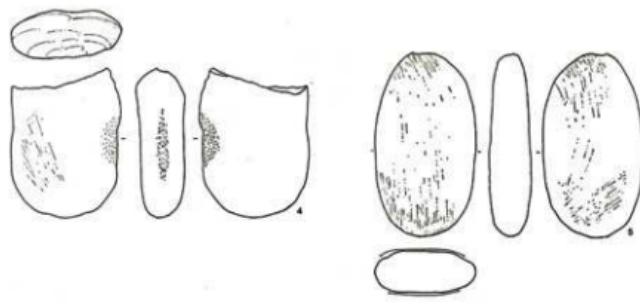
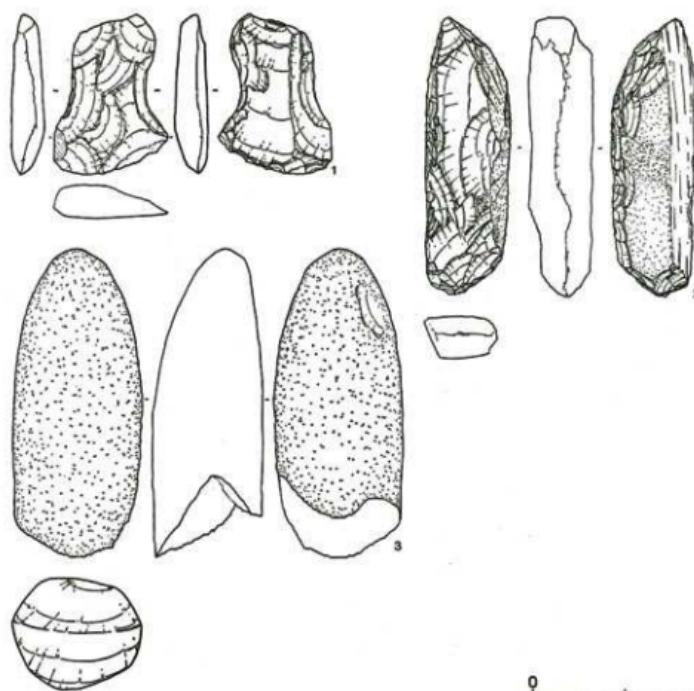
1は打製石斧である。風化が進んでおり細部調整は不明瞭であった。平面形は両側縁に浅い抉りが入っており、撥形になっている。刃部調整は裏面だけに見られる。基端部は欠損している。

2は磨製石斧の未完成品と思われる。側縁調整は表面は左側縁、裏面は右側縁に施され横断面は平行四辺形になっている。裏面には自然面を残し、敲打痕が見られる。左側面は節理で分割されている。

3は全面敲打によって作られている。刃部は基部で欠損しているため不明である。断面を見ると裏面が平坦になったため蒲鉾状になっている。

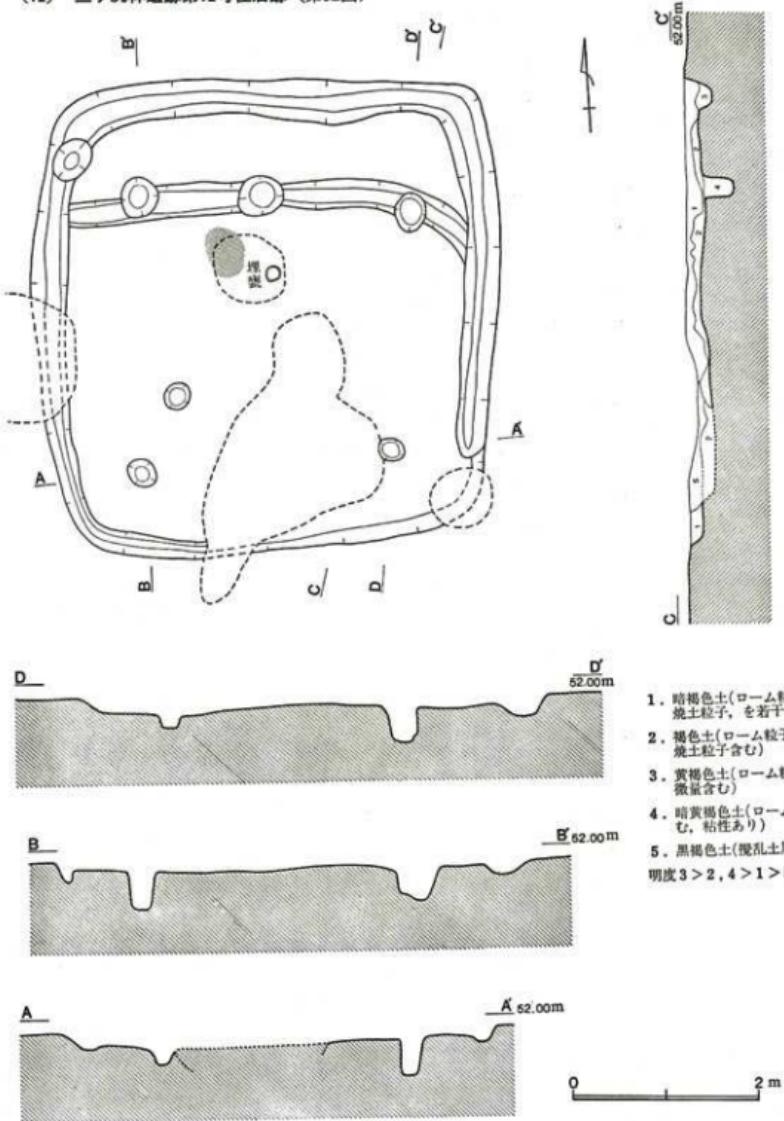
4は扁平の河原石を利用したすり石である。頭部は欠損している。磨痕は長軸に平行方向に部分的に見られる。右側縁に敲打痕がある。

5は扁平の河原石を利用したすり石である、磨痕の方向は長軸に平行している。（西井 幸雄）



第91图 第11号住居跡出土石器实测图

(12) 三ヶ尻林遺跡第12号住居跡（第92図）



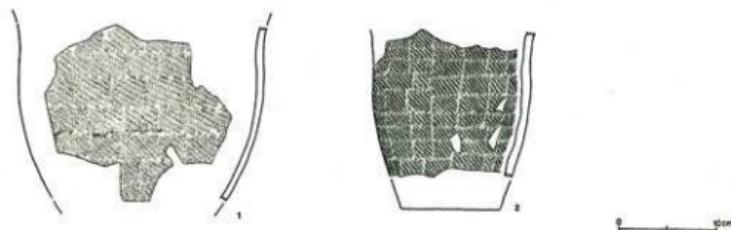
第92図 第12号住居跡

D-19・20、E-19・20グリッドに位置する。本住居跡は調査区南端(台地東端)にあたり、第16号墳の周溝内に検出された。壁面は殆ど残っておらず、周溝は北側を2重に巡る。プランは長方形に近い方形を呈し、長径5.10m×短径5.02mを測る。また、内側の周溝付近から埋甕が検出され、土器の胸部約事が埋設されていた。炉址は中心よりやや北側に寄った位置で検出された。焼土は厚さ1~2cm程の地床炉で、長期間にわたって使用された可能性は少ないと考えられる。柱穴は6本検出され、床面はやや起伏に富んでいる。遺物はやや浮いた状態で出土していたが、第16号墳構築時に動いていると考えられる。土器は実測図2点を含む破片類と石器類が出土した。本住居跡の所属時期は第11号住居跡と並んで、黒浜期の新しい段階に相当するものと考えられる。

#### 土器 (第93~97図)

第93図1: 推定胸径25.1cmの深鉢形土器の胸部大形破片である。胸部は若干張り、上半部はわずかに括れ、口縁部は強く外反すると考えられる。地文は単節RLで横方向に回転施文されている。色調は外面はにぶい赤褐色~暗褐色、内面はにぶは赤褐色である。胎土に纖維は含まれず、内外面の調整も丁寧である。

第93図2: 深鉢形土器の胸部。胸径15.7cm、口縁部及び底部を欠損している。底部は平底を呈すると思われる。地文は全面にわたり単節RLが横方向に回転施文されている。胎土に纖維は含まれず、砂粒及び片岩を多量に含む。色調は外面は赤褐色~暗褐色、内面はにぶい赤褐色~暗褐色である。焼成は堅式である。埋甕。



第93図 第12号住居跡出土土器実測図

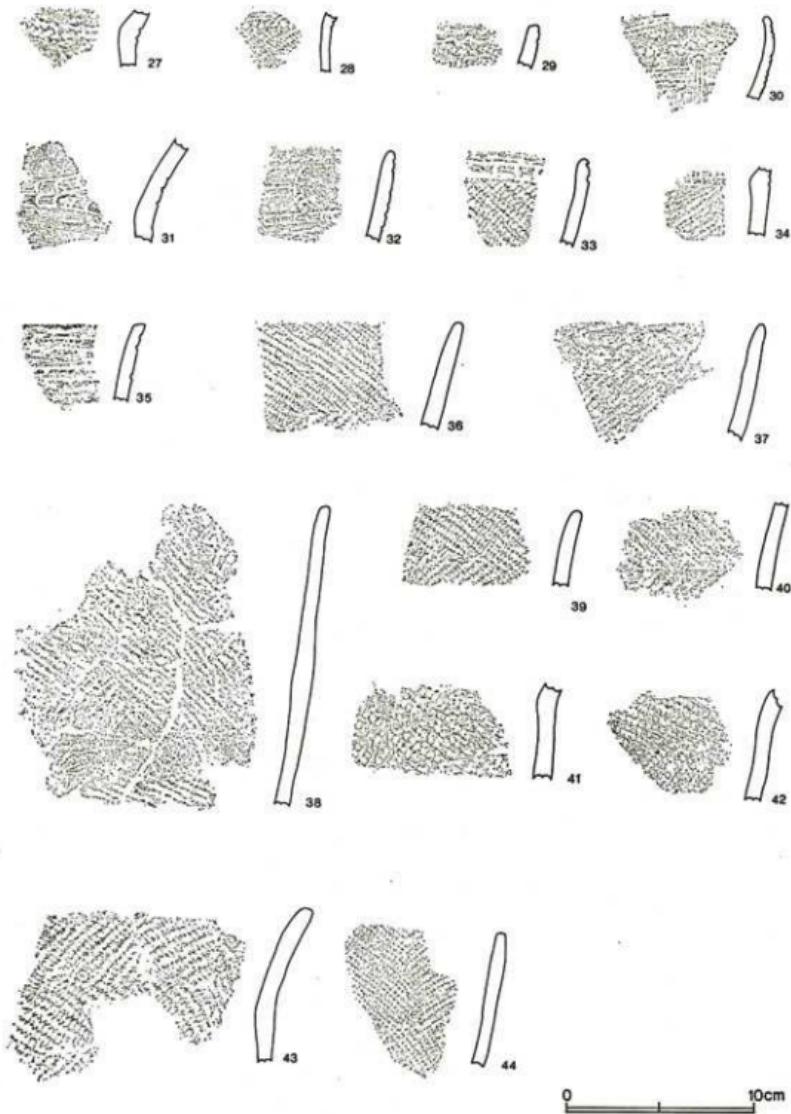
第1類 (第94図1~14、25) 1~4、7、8、10は半截竹管による鋸歯状モチーフが基本とされる。9は平行沈線に小形の鋸歯状モチーフが付加される。他は単一の平行沈線文で文様構成される。2は波状口縁を呈し、口唇に半截竹管による刻み列を配している。25は集合沈線文が横位に施文されている。

第2類 (第94図15~21、第96図52) 19、52は波状口縁を呈する土器で、直下に平行沈線が施文されている。21は集合沈線文である。15は鋸歯状モチーフを構成する。地文は15、18、20は単節RL、21はLR、19、52はL、17・R、16はLRとRLで各々横方向に回転施文している。

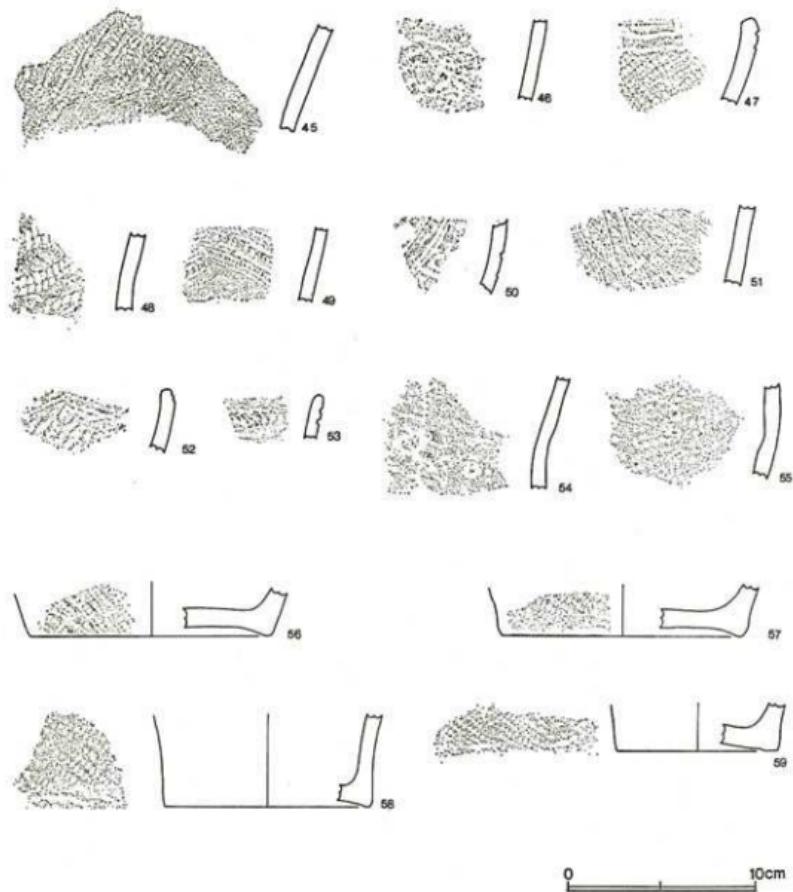
第3類 (第94図22~24、26、第95図30) いずれも複数の段にわたってコンバス文が配される。



第94図 第12号住居跡出土土器拓影図(1)



第96図 第12号住居跡出土土器拓影(2)



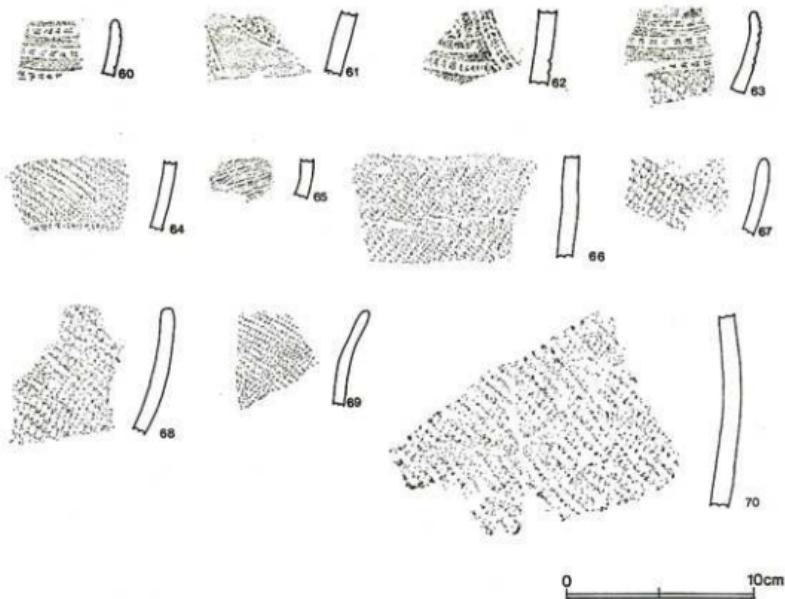
第96図 第12号住居跡出土土器拓影図(3)

22は集合沈線、23、24、30は平行沈線文と組合される。

第4類（第95図27～29） 29は口縁部の破片で、27、28は胴部破片である。27は幅3～4mmのコンバス文で、末端が深く施文される。27、28は単節LR、29はRLが横方向に回転施文される。

第5類（第95図31～35） 31、32は連続する爪形文を多条に配し、円形（渦巻）鋸歯状等のモチーフを構成するとみられる。他は主に口縁部及び胴部の括りに文様帶を配する土器である。

第7類（第95図36、39～50、53） 39～44、47は単節RL及びLRを横方向に回転施文して、羽状繩文を構成している。47は口縁部直下に原体を押圧したような有節の平行沈線が配される。36は単節RL、46はLRを横方向に回転施文している。他は附加条である。



第97図 第12号住居跡出土土器拓影図(4)

第8類（第95図37、38、第96図51、54、55 37、55は、38は無節RとLを横方向に回転施文している。51は附加条。54は無文である。

第10類（第97図60～63） 爪形文を多条に配し、文様帶を構成するもので61、62は鎌歯状のモチーフであると思われる。63は波状口縁と考えられ、単節RLが施文される。

第11類（第97図64～70） 64、66～70は単節RLを横方向に回転施文している。65はLの附加条。

第12類（第96図56～59） 上げ底を呈する深鉢底部の破片で、直上の地文は57～59は単節RLを横方向に回転施文している。56は附加条。  
（星間 孝志）

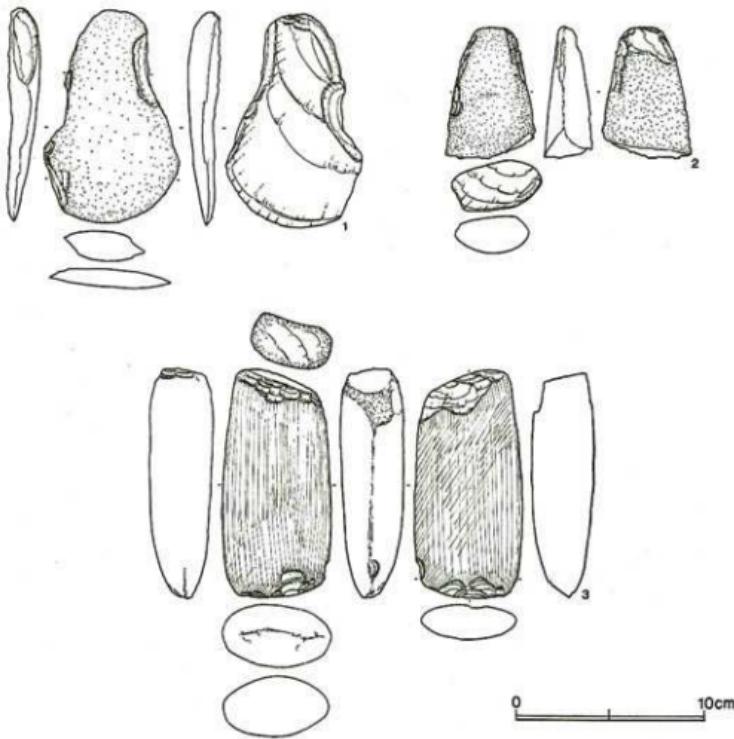
石器（第98図） 本住居跡は発掘区の東側に離れて存在する。遺物量は少ない。

1は打製石斧である。片面に自然面を残した。横広の剥片を素材としている。調整加工は側縁のみに施されており、刃部は剥片の縁辺と自然面の曲線を利用していている。

2は表面に自然面を残し、裏面に敲打痕が施されている。基部で欠損しているが磨製石斧の未成品と考えられる。

3は磨製石斧である。基部は両側縁がほぼ平行し、横断面は橢円形を呈している。刃部は両凸刃で、刃縁に刃毀れが見られる。基端は剥離によって作られ、基端面の周縁を敲打している。

（西井 幸雄）



第98図 第12号住居跡出土石器実測図

(13) 三ヶ尻林遺跡土壙（第99～101図）

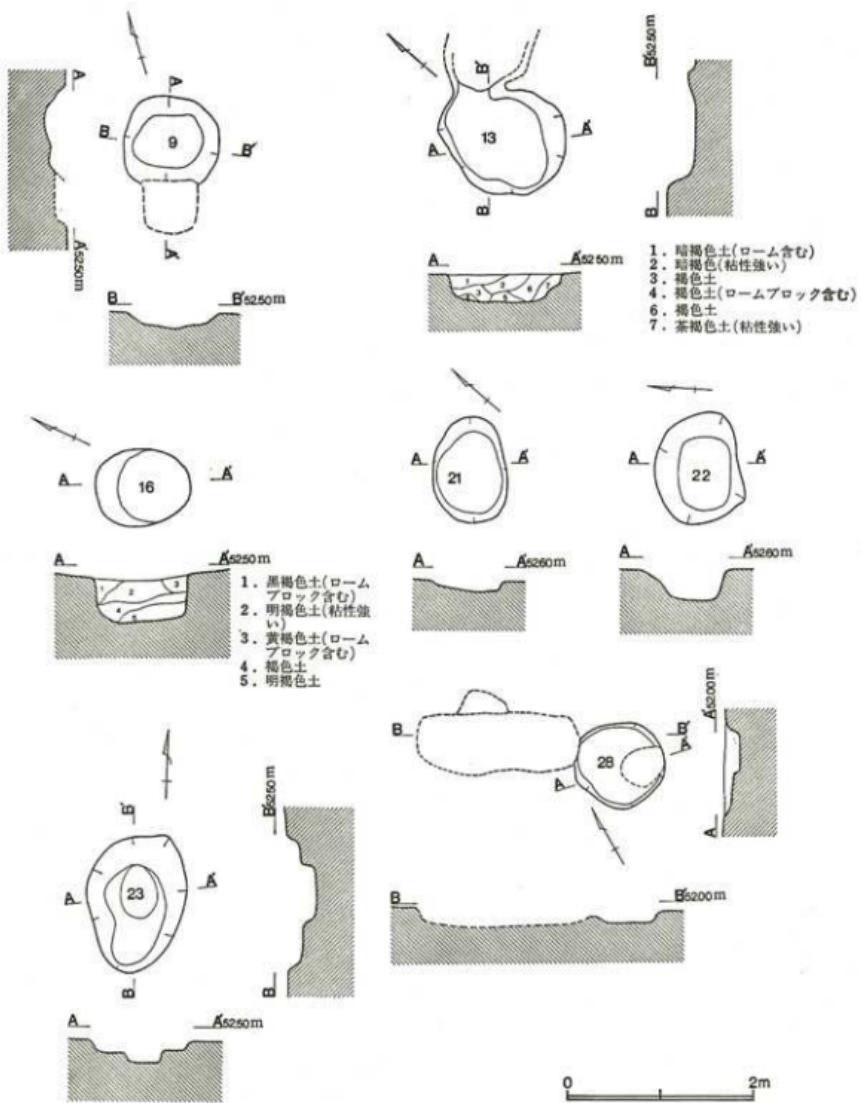
第9号土壙（第99図） F—6グリッドに位置する。第10号土壙（既報告）と切り合い関係にある。第10号土壙より古い。プランはほぼ円形を呈し、長径1m×短径0.95m、深さ20cmを測る。遺物は黒浜期の土器小破片数点が出土している。

第13号土壙（第99図） D—6グリッドに位置する。第14号土壙と切り合い関係にある。プランはほぼ円形を呈する。長径0.95m×短径0.80m、深さ20cmを測る。礫が多量に混入していた。

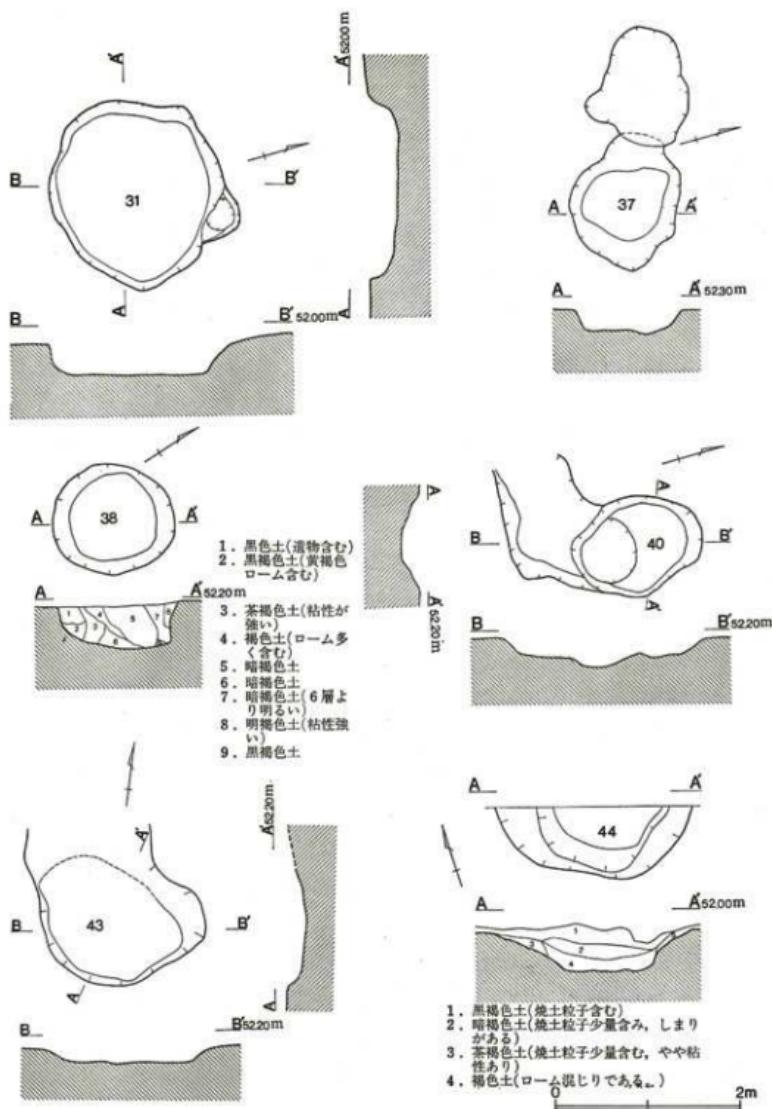
第16号土壙（第99図） D—15グリッドに位置する。ほぼ円形のプランを呈し、長径1m×短径0.95m、深さ55cmを測る。覆土は暗褐色土～ローム混じり黒褐色土。出土遺物なし。

第21号土壙（第99図） E—3グリッドに位置する。プランは梢円形を呈する。長径1.14m×短径0.78m、深さ12cmを測る。遺物は黒浜期の小破片が数点出土した検出された。暗褐色～土層暗褐色土。

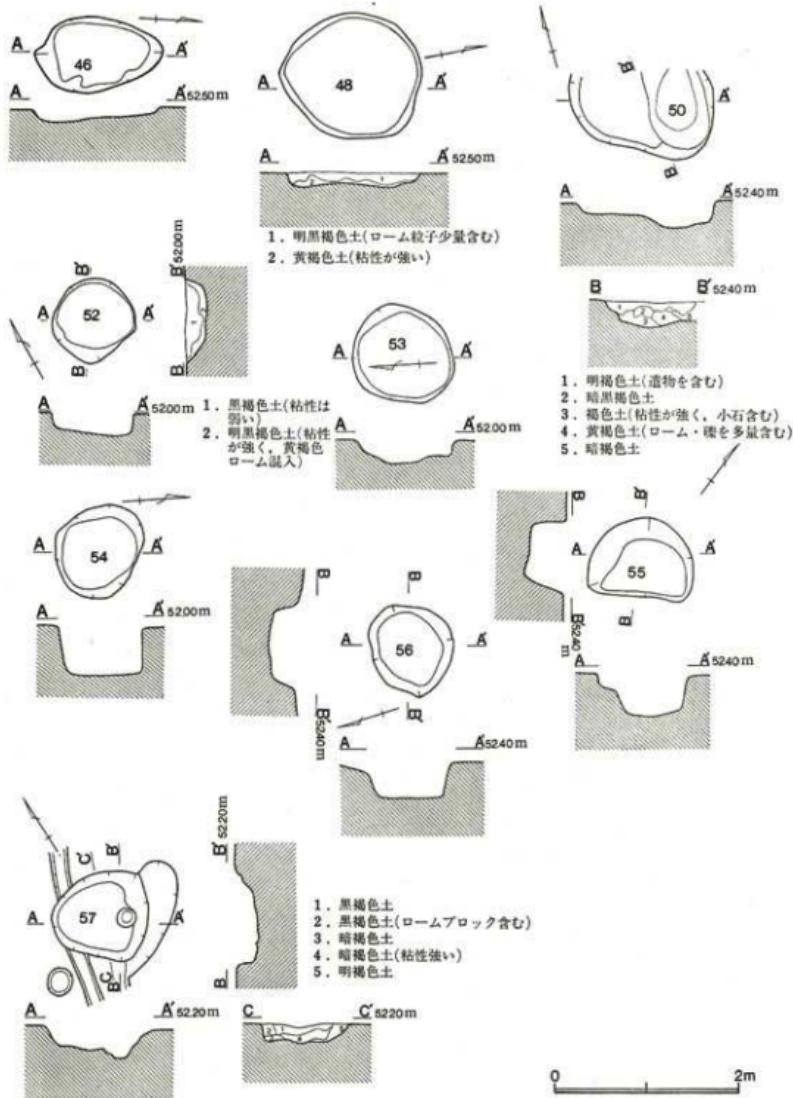
第22号土壙（第99図） E—4グリッドに位置する。プランは梢円形を呈し、長径1.22m×短径



第99図 土 填 (1)



第100図 土 塙 (2)



第101図 土 墓 (3)

1.04m、深さ25cmを測る。遺物は黒浜期の小破片が出土した。

第23号土壌（第99図） D-14グリッドに位置する。プランは梢円形を呈し、長径1.55m×短径1.20m、深さ20cmを測る。黒褐色土～暗褐色土。

#### 第26号土壌（第99図）

G-17グリッドに位置する。第29号土壌に切られ、部分的に床面まで攪乱を受けている。プランはほぼ円形を呈し、長径0.95m×短径0.92m深さ12cmを測る。遺物は黒浜期の土器破片が少量出土した。黒褐色土～暗褐色土。

第31号土壌（第100図）G-17、H-17グリッドに位置する。円形プランを呈する。長径1.45m×短径1.40m、深さ20cmを測る。遺物は疊に混じり、黒浜期の土器破片及び磨製石斧が1点出土した。

第37号土壌（第100図）H-14・15グリッドに位置する。第36号土壌に切られ、プランは不整梢円形を呈する。長径1.52m×短径1.40m、深さ20cmを測る。遺物は黒浜期の小破片が少量出土した。

#### 第38号土壌（第100図）

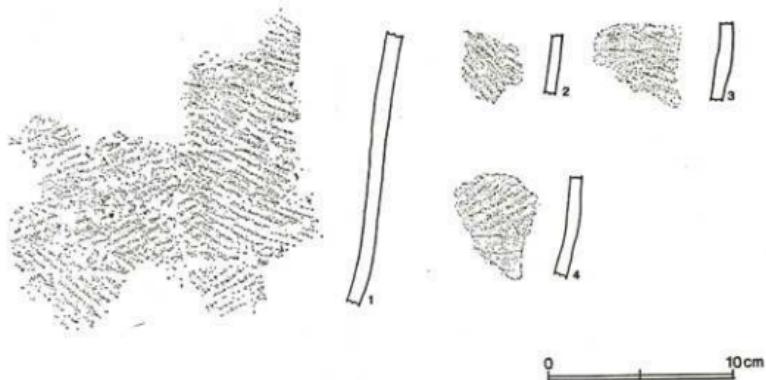
G-15・H-15グリッドに位置する。ほぼ円形プランを呈し、長径1.30m×短径1.20m、深さ35cmを測る。黒浜期の小破片と磨製石斧が1点出土した。

第40号土壌（第100図）H-15グリッドに位置する。第42号土壌を切っている。プランは梢円形を呈し、長径1.40m×短径1.00m、深さ1cmを測る。遺物は黒浜期の土器1点であった。

第41号土壌（第100図）H-43グリッドに位置する。プランは梢円形を呈すると考えられ、長径1.10m×推定短径1.00m、深さ10cmを測る。遺物は黒浜期の土器が浮いた状態で出土している。

第44号土壌（第100図）C-18グリッドに位置する。東側半分は調査区外の為、不明であるが、梢円形のプランを呈すると思われ、長径1.30m×短径0.55m、深さ30cmを測る。遺物は黒浜期の土器破片の他、石器数点が出土した。また、火熱を受けたとみられる疊が数点検出された。

第50号土壌出土土器（第102図）1～4は深鉢胴部の破片で、2、3は無節R、4はR、1はRとLの羽状縞文で、各々横方向に回転施文されている。



第102図 第50号土壌出土土器拓影図

第46号土壙（第101図） F—4 グリッドに位置する。プランは梢円形を呈し、長径1.40m×短径0.05m、深さ15cmを測る。

第48号土壙（第101図） F—6 グリッドに位置する。ほぼ円形のプランを呈し、長径1.52m×短径1.40m、深さ12cmを測る。遺物は黒浜期の土器小破片及び石皿を含む石器5点が出土した。

第50号土壙（第101図） C—7 グリッドに位置する。東側は調査区外の為、検出できなかったが、プランは梢円形を呈する。長径1.20m×推定短径0.90m、深さ35cmを測る。北側の落ち込みと切り合うが、第50号壙のみ遺物が出土した。遺物は黒浜期の深鉢腹部がつぶれた形で出土している。

第52号土壙（第101図） G—15 グリッドに位置する。ほぼ円形プランを呈し、長径0.72m×短径0.55m、深さ25cmを測る。遺物は砾に混じって黒浜期土器片が出土している。

第53号土壙（第101図） G—15 グリッドに位置する。ほぼ円形のプランを呈し、長径1.12m×短径1.03m、深さ30cmを測る。遺物は黒浜期の土器小破片と磨製石斧、石皿などの破片が、浮いた状態で出土している。

第54号土壙（第101図） E—21 グリッドに位置する。ほぼ円形プランを呈する。長径1.02m×短径0.98m、深さ1cmを測る。底面より黒浜期の土器片出土。

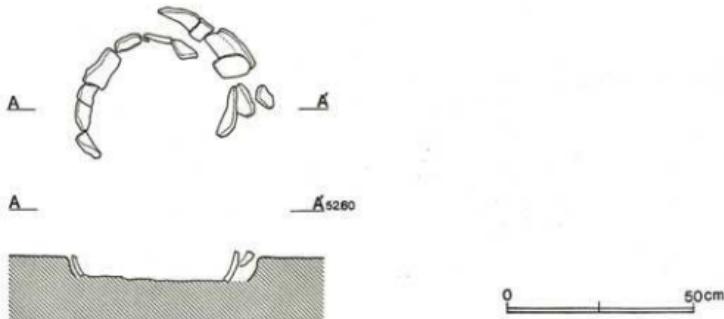
第55号土壙（第101図） G—8 グリッドに位置する。ほぼ円形のプランを呈し、長径1.02m×短径0.92m、深さ25cmを測る。

第56号土壙（第101図） G—6 グリッドに位置する。不整円形を呈し、長径1.20m×短径0.90m、深さ43cmを測る。遺物は出土しなかった。

第57号土壙（第101図） H—11 グリッドに位置する。第9号住居跡の周溝（壁溝）を切る。プランは梢円形を呈し、長径1.45m×短径1.12m、深さ25cmを測る。遺物は黒浜期の土器片が底面より出土した。

（星間 孝志）

（14） 単独埋甕（第103～104図） D—7 グリッドより口縁部と腹部の一部が逆位の状態で検出された。やや内湾気味の口縁部は推定53cmを測る。口縁部は一条の沈線下に梢円形区画文とS字、Z字状文が左右に施文される。地文は単節RLが、斜方向に回転施文されている。内外面とも明褐色を呈する。



第103図 単独埋甕

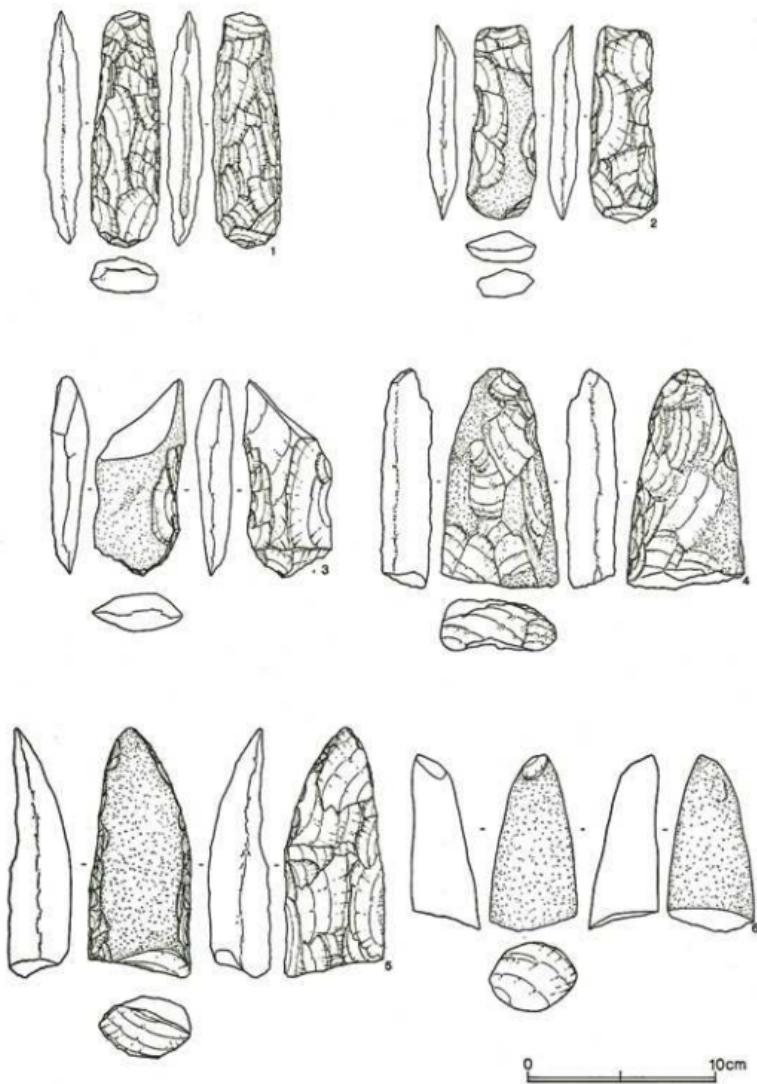


第104図 単独埋甕実測図

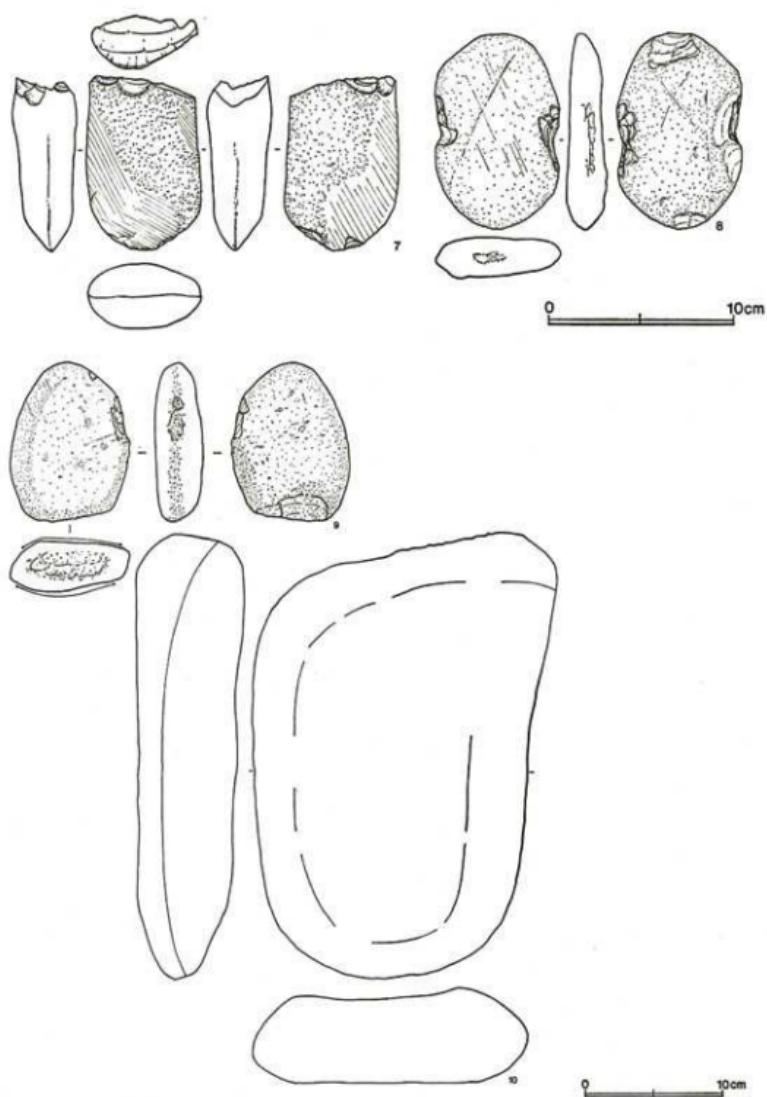
石器（第105～106図）

- 1（第48号土壙） 打製石斧である。基端と刃部の幅があまり変わらず、短冊形である。右側縁に自然面を残している。
- 2（第20号土壙） 打製石斧である。基端と刃部の幅があまり変わらず、短冊形である。表面には大きく自然面を残している。刃部は裏面に前方よりの剥離が行なわれている。
- 3（第50号土壙） 打製石斧である。基端を欠損しているが、形態的には短冊形になると思われる。表面には自然面が残り、刃部は裏だけに加工が施されている。
- 4（第30号土壙） 磨製石斧の未成品と思われる。表面に部分的に自然面を残すが、剥離調整によって荒く形を作り、後で敲打を行なっている。基部の中ほどで欠損しており、製作途中であったと思われる。
- 5（第38号土壙） 磨製石斧の未成品と思われる。表面には大きく自然面を残しており、調整加工は裏面に施され、所謂片面加工である。表面と側縁の一部に敲打痕が見られる。
- 6（第57号土壙） 磨製石斧の未成品と思われる。全体に敲打が行なわれている。基端部の所に剥離が見られる。基部で欠損している。
- 7（第57号土壙） 磨製石斧である。基部には敲打痕が見られる。研磨は表面では刃部と左側、裏面では刃部から左側と表裏同一の所に行なわれている。刃を正面から見ると直線である。研磨が部分的である事から未成品の可能性もある。
- 8（第55号土壙） 扁平の河原石を素材とし、短軸の両端に細かい剥離が見られる。
- 9（第31号土壙） すり石である。扁平の河原石の平坦面に磨痕が見られる。
- 10（第48号土壙） 大型の扁平の河原石を素材とし、その平坦面を利用している。形を作ってはおらず、河原石をそのまま利用している。

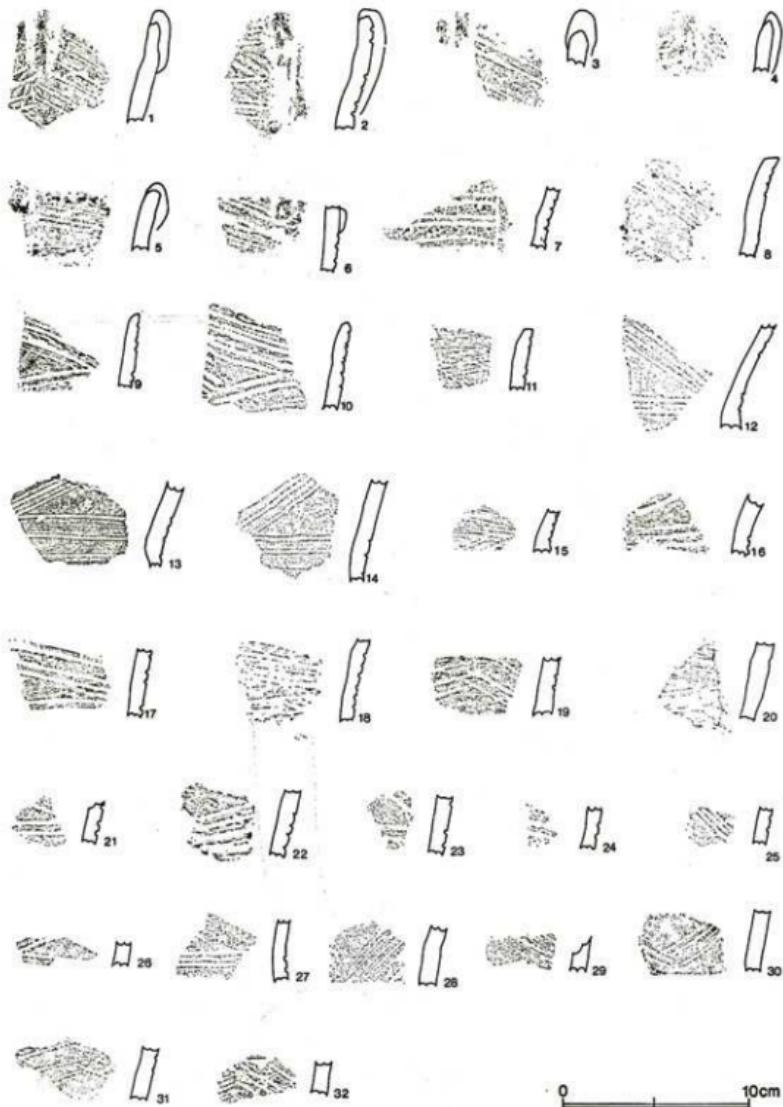
（西井 幸雄）



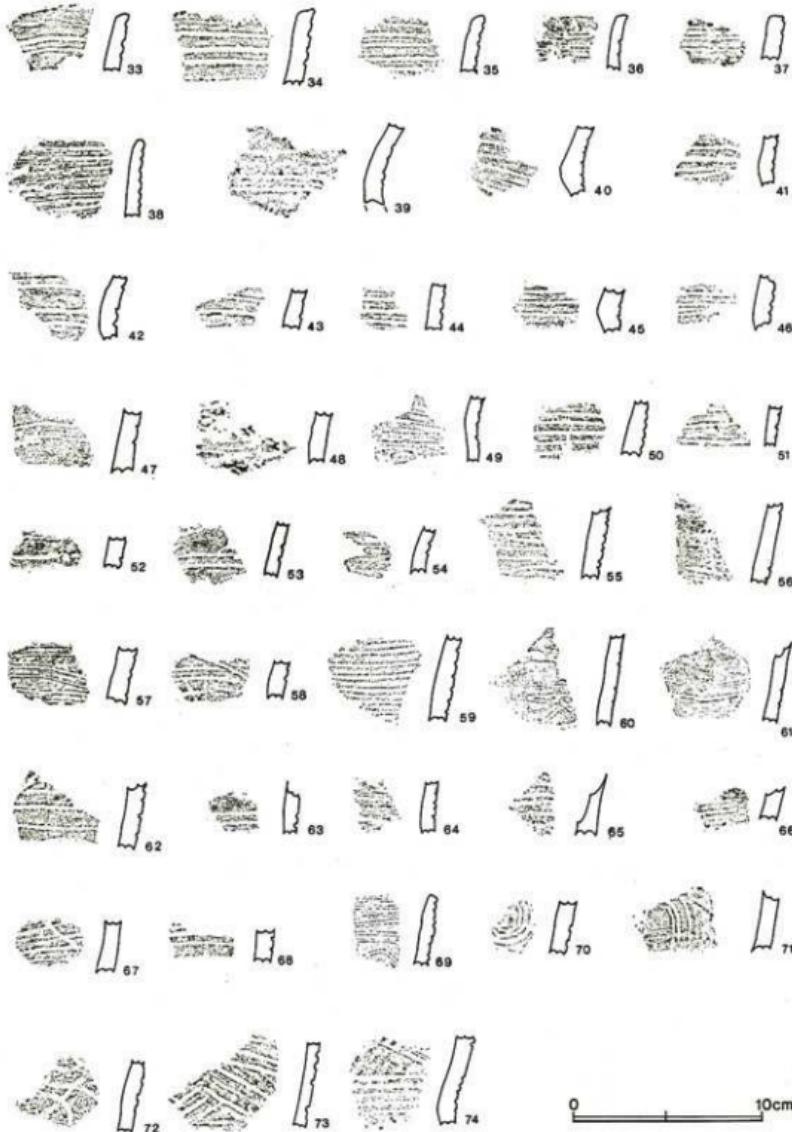
第105図 土壤出土石器実測図(1)



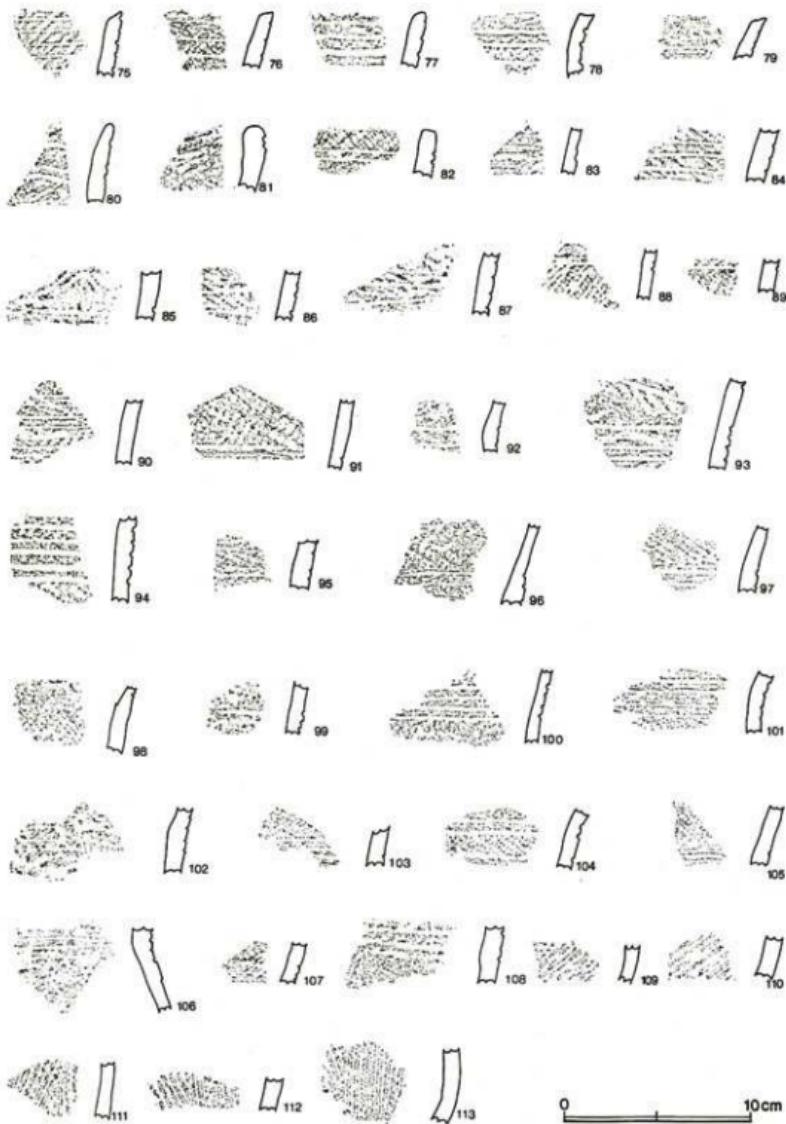
第106図 土壌出土石器実測図 (2)



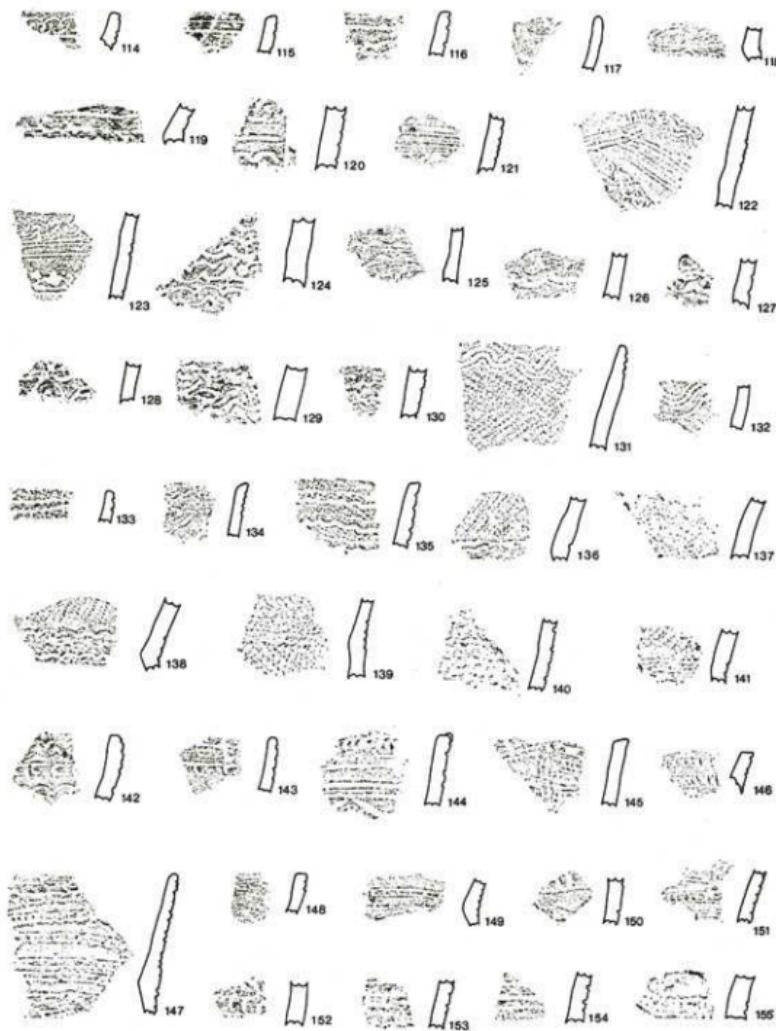
第107図 グリッド出土土器拓影(1)



第108図 グリッド出土土器拓影図(2)

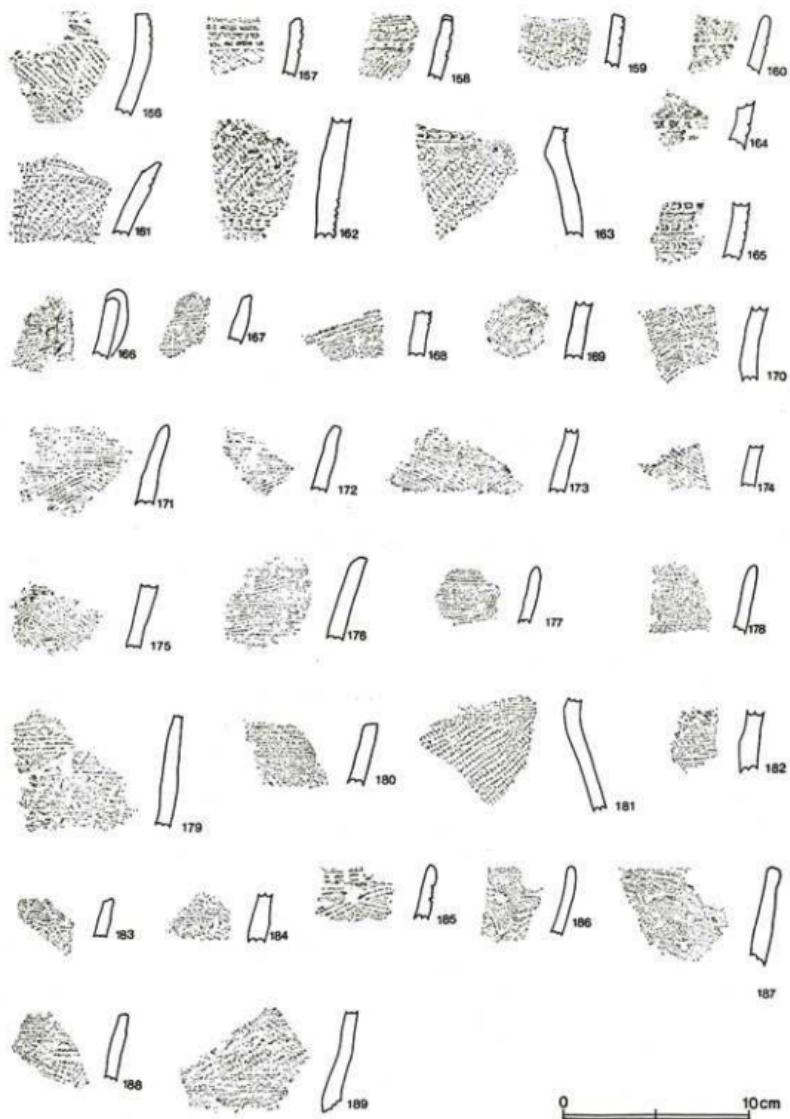


第109図 グリッド出土土器拓影図(3)



0 10cm

第110図 グリッド出土土器拓影図(4)



第111図 グリッド出土土器拓影図(5)

### (15) グリッド出土土器 (第107~116図)

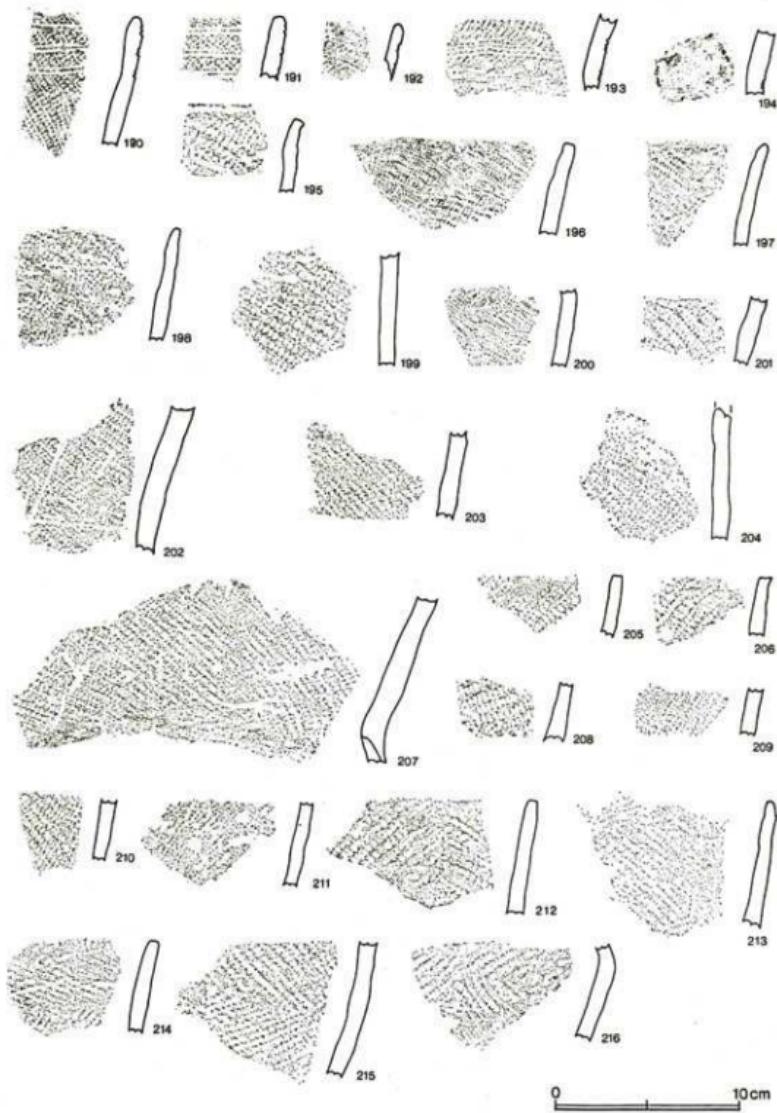
三ヶ尻林遺跡では黒浜期の住居群と土塙群の他は加曾利E期の単独埋甕が検出されただけで他の縄文時代の造構等は検出されなかった。以下に示す遺物は主に表土、包含層より採集されたものである。

第1類 (第107図1~32、第108図33~72、第109図109~113、第111図169~178) 口縁部文様帶として半截竹管に鋸歯状モチーフを基本に文様構成される土器群である。1~5、8~11は口縁部の破片で、いずれも波状口縁を呈する。1~6は波頂部に隆帯を貼付し、単位構成の明確化に効果を持っている。また、5の口唇部には爪形文が連続的に、10の口唇部には半截竹管による刻み列が5mmごとに配されている。施文具として使用された半截竹管は何種類も存在するようで、幅広のものから集合沈線風に密に束ねたものまで、施文箇所に応じた使用パターンが存在するようである。2は無節RとL、7はLが地文として横方向に回転施文されている。12~32は胴部上半 (口縁部付近含む) の破片である。33~68は平行沈線のみで、鋸歯状モチーフと組合わないものも存在するが、組合うものも多いと見て、小破片ではあったが、一括して含めた。33~38は外反する口縁部の破片で、35は口唇部に連続する刻みを配している。39~68は胴部上半の破片である。69~72は半截竹管による特異な文様描写で、69は鋸歯状、70~72は風車状渦巻文に類似するモチーフが想定できる。以上の土器群は施文時に粘土が乾燥途中、あるいは乾燥寸前で施文されたものが多く、施文時の粘土の片寄りが顕著である。109~113は集合沈線によって施文されている。166~178は集合化された平行沈線文によって鋸歯状モチーフを基本とした文様構成がされている。166は口唇部から口縁部にかけて突起状の隆帯が添付され、隆帯には縦に刺突が2列配されている。169、175は3本1組の沈線で2条上下に鋸歯状モチーフを構成している。沈線間は174のように間隔が異なっているケースもあり、ヴァリエーションは豊富である。

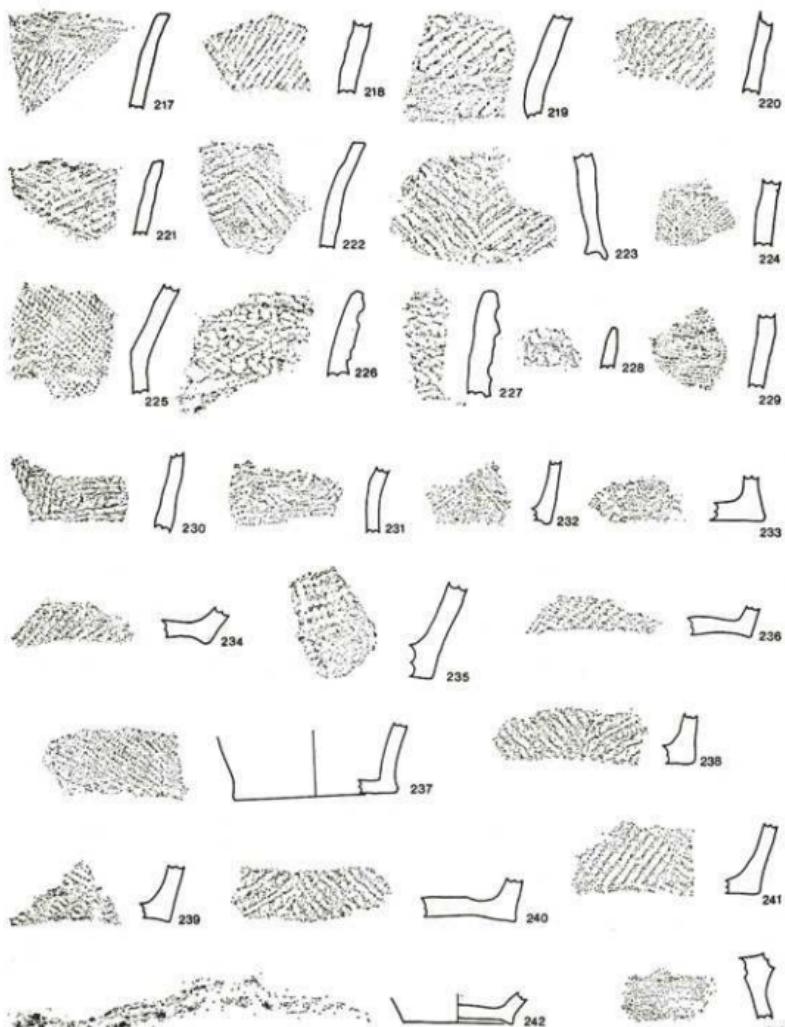
第2類 (第108図73、74、第109図75~108、第111図179~182、188~194) 73、74、80、93は半截竹管による鋸歯状モチーフを基本とした土器である。75~77、79~82は口縁部の破片で、80、81は口唇部が丸味を帯びるが他は平坦に整形され、いずれも外反する。他は胴部上半の破片である。また、179~182は集合沈線文の土器群である。地文は74、82、88、89、107、181はL R、77、78、80、81、84、85、87、91、93、94、105、188はR L、他は無節R及びLで各々横方向に回転施文されている。190、191は附加条が施されている。

第3類 (第110図114~130、140、183、184、186) 半截竹管による鋸歯状モチーフは、コンパス文と組合されると平行沈線や爪形文の場合とは異なり、122のようになってくる。本遺跡ではコンパス文を鋸歯状にして多条化し、平行沈線文と組合わされることは殆どない。このような土器は出土量が極めて少ない方である。114~117は口縁部の破片で、114のように口唇が平坦で口唇直下からコンパス文と平行沈線文が交互に施文されるケースが比較的多くみられる。117は極めて少ない。他は胴部上半の破片である。140は竹管の末端が強く施文される183、184、186は集合沈線文による。

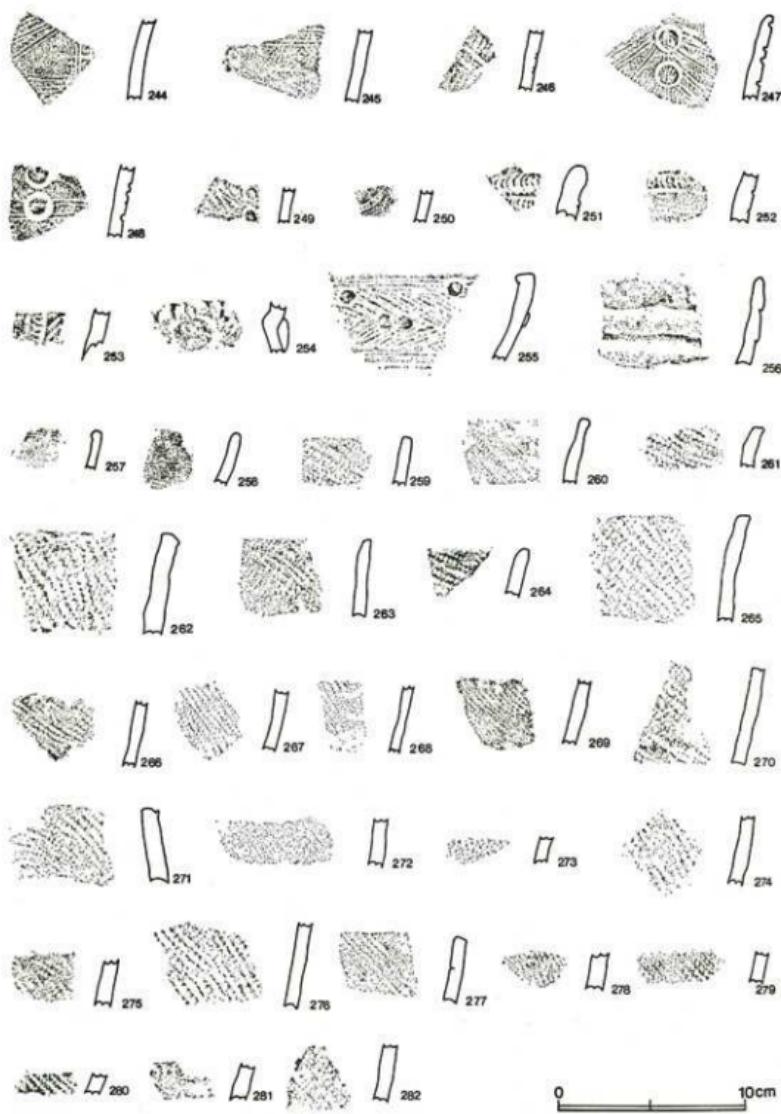
第4類 (第110図131~139、141) 131、133~135は口縁部の破片で、いずれも外反し、平坦に整形される口唇をもつ。他は胴部の破片である。133は小単位の半截竹管を用い、幅2~3m程のコ



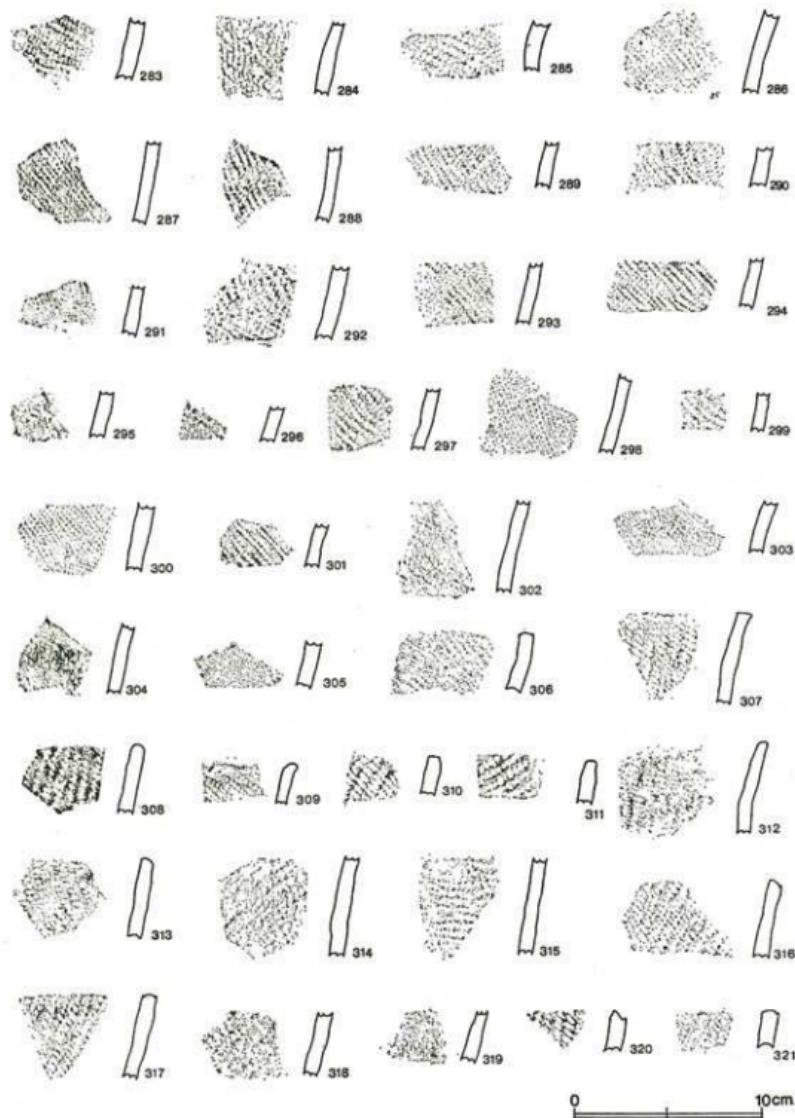
第112図 グリッド出土土器拓影図 (6)



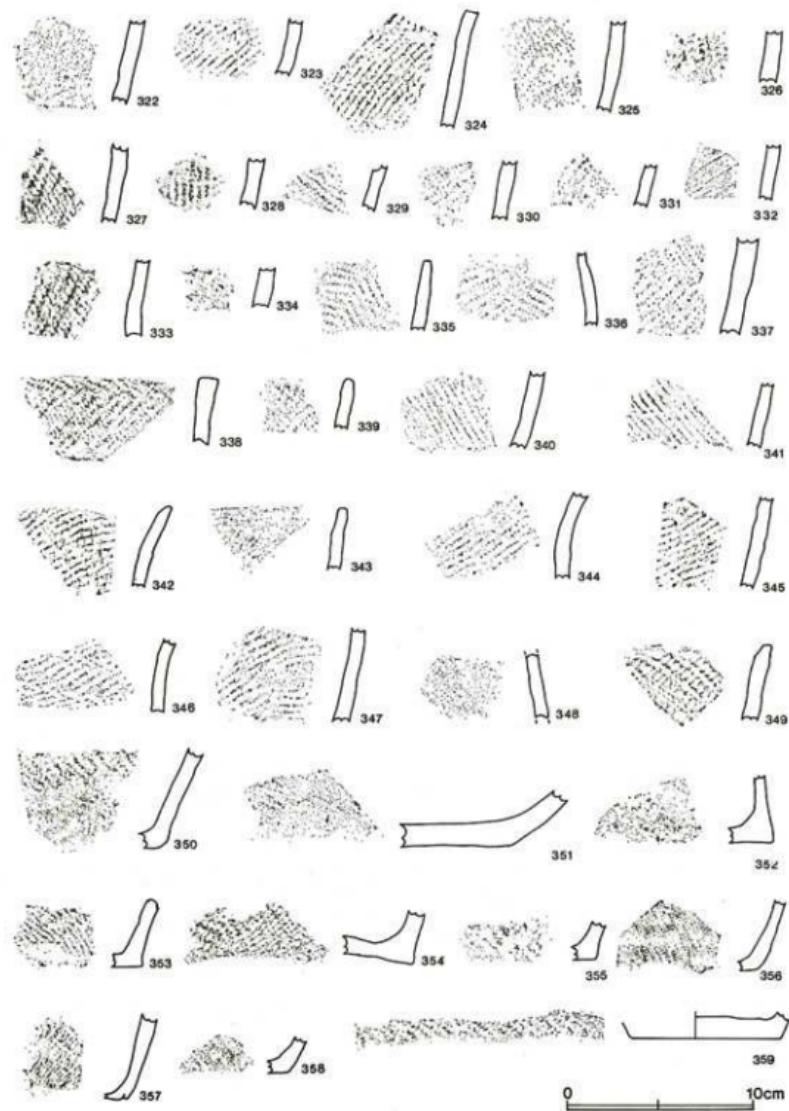
第113図 グリッド出土土器拓影図 (7)



第114図 グリッド出土土器拓影図(8)



第115図 グリッド出土土器拓影図(9)



第116図 グリッド出土土器拓影図 ⑩

ンバス文である。133～136、138、139、141のコンバス文はやや直線的な傾向がみられる。

第5類（第110図142～155、第111図156～165） 142～148、157～161は口縁部の破片で、161のような尖った口唇を除くと平坦なものと丸味をもつものが一般的な口唇部の形態である。他は胴部破片である。爪形文は144のように口唇部に施文するケースを除けば、147のように爪形文を多条化して文様構成するものや145のように平行沈線文によって縦割り区画の生じているものや142のようにコンバス文と組合わさる場合においても平行沈線間に充填されるのが一般的である。いずれも施文方法としては統一されている。156、157はR、153、160はR L、161、163はL R、162はR L、L Rの羽状繩文で各々横方向に回転施文されている。158は附加条が施されている。

第7類（第112図195～216、第113図225～231） 195～198、212～214は外反する口縁部の破片で、口唇直下から繩文が施され、半截竹管等の施文具による文様構成はされない。他はいずれも胴部の破片である。212～214は口縁部から羽状繩文が施文される。195～204、207、210はR L、205～205、208～209、211・L Rで各々横方向に回転施文されている。225～231は附加条。

第8類（第113図217～224） 217～220はL、221～224・Lとの羽状繩文で各々横方向に回転施文されている。本遺跡では223のように接合面より剥離した状態で出土したケースが多く見られた。217、221、222の口縁は強い外反を示す。

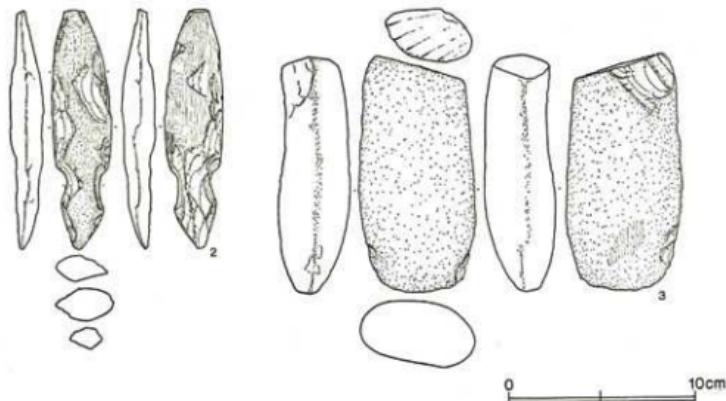
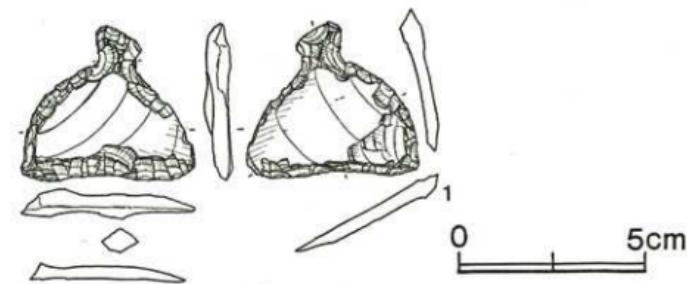
第12類（第113図187、232～243） 平底に近い底部形態を示す。238、241を除いてすべて明瞭な上げ底形態である。232は半截竹管で浅く、縦の平行線をはさんで鋸歯状に施文されている。他は繩文が横位に回転施文されている。243は無文の台付浅鉢の底部付近で、187は無文の台付浅鉢の口縁部と考えられる。いずれも胎土に纖維を含む。

第9類（第111図185、第114図244～257） 112は三本1組の集合沈線で主要なモチーフを構成する。口唇直下に連続する刺突列を配し、口縁部には円形刺突文（あるいは貼付文）を中心に沈線を交差させた文様帶を配している。244～246は平行沈線は浅く施文されている。地文は244は無節R、他はLで横位に回転施文されている。247～249は平行沈線と円形刺突文が組合されている。250～253は爪形文が施されたもので、250は他に比べ幅狭な半截竹管で施文されている。254、255は貼付文の土器で、254は半截竹管による連続的に刻み列が配される。255は平行沈線間に矢羽状に施文された上に貼付されている。254、255は諸種c式、251～253は諸種b式、他は諸種a式である。256は口縁部に3段の隆帯をもつ。浮島式。

第11類（第114図257～282、第115図283～321、第116図322～359、第112図197、第113図218） 繩文のみが器面全体に施文されるものを一括した。繩文単節R L、L R、無節R及びLである羽状繩文は少ない。

第12類 胎土に纖維を含まない底部破片を一括した。平底を呈するものが多く、直上には単節R L・L R・無節R及びLが横方向に回転施文される。

（星間 孝志）



第117図 グリッド出土石器実測図(1)

#### 石器（第117、118図）

1は石匙である。本遺跡から出土した唯一の小形石器である。

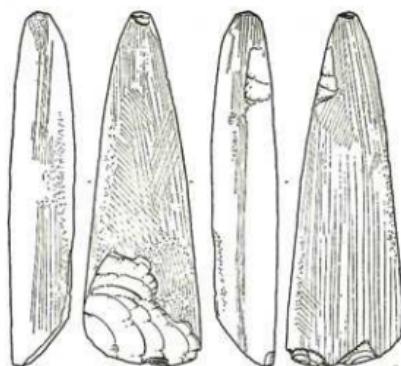
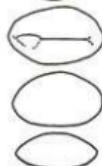
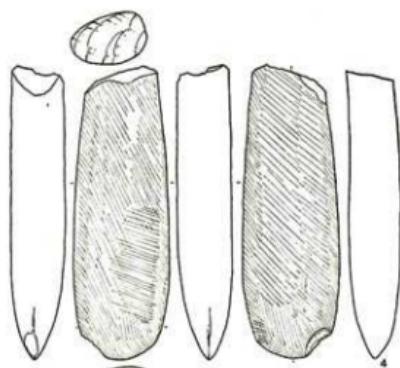
2は尖頭器と分類しておいた。先端部は新しい割れ口である。基部に両側から抉りが入っている。表面に自然面を大きく残し、裏面は剥離加工を行ない、後に研磨を施している。

3は磨製石斧の未完成と思われる。全面に敲打が施されており、形状はほぼ磨製石斧として完成している。しかし、研磨は行なわれておらず刃部は丸いままである。基端部は節理によって欠損している。

4は磨製石斧である。全面に研磨がよく施されている。基端を欠損している。形状は両側縁がほぼ平行しており優美な感じを受ける。刃部の平面形は円刃で、縦断面は両凸刃で表裏対象である。刃面と基部の間には鏽は見られない。刃を正面から見るとほぼ中央を直線になっている。

5は磨製石斧である刃部は前方の力によって大きく欠損している。

（西井 幸雄）



0 10cm

第118図 グリッド出土石器実測図 (2)

番号	石器名		石質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)
第1号住居跡							
1	打製	石斧	安山岩	11.4	6.9	1.2	66.41
2	打製	石斧	ホルンフェルス	13.3	7.3	1.1	158.52
3	打製	石斧	砂岩	6.6	2.7	1.0	24.25
4	打製	石斧	泥岩	8.4	7.9	1.4	91.18
5	打製	石斧	凝灰岩	19.8	6.1	4.1	600.00
6	打製	石斧	ホルンフェルス	9.1	6.1	3.2	258.55
7	磨製	石斧の未成品	凝灰岩	24.0	7.3	5.6	1,419.60
8	磨製	石斧の未成品	砂岩	22.0	7.4	5.9	142.00
9	磨製	石斧の未成品	凝灰岩	24.3	7.8	5.2	1,581.00
10	磨製	石斧	凝灰岩	16.2	9.4	3.2	811.58
11	礫	石器	砂岩	12.3	9.2	3.5	600.00
12	すり	石	安山岩	15.2	10.7	—	1,100.00
13	すり	石	安山岩	11.2	11.6	—	591.42
14	すり	石	安山岩	12.6	12.2	—	831.16
15	凹	石	雲母片岩	19.2	9.6	—	811.58
16	石	皿	安山岩	16.3	24.5	5.6	2,270.00
17	石	皿	雲母片岩	—	14.2	7.7	2,780.00
18	石	皿	安山岩	18.0	19.1	3.6	2,360.00
19	石	皿	砂岩	15.9	11.7	10.2	2,140.00
第2号住居跡							
1	打製	石斧	凝灰岩	10.9	6.1	3.1	248.90
2	磨製	石斧の未成品	凝灰岩	10.0	4.8	3.0	242.40
3	礫	器	砂岩	8.7	4.7	2.2	158.50
第3号住居跡							
1	打製	石斧	石英玢岩	16.8	6.0	2.1	325.55
2	打製	石斧	凝灰岩	15.0	7.0	3.5	270.00
3	磨製	石斧の未成品	凝灰岩	13.2	6.6	3.9	276.80
4	磨製	石斧の未成品	凝灰岩	17.7	5.8	4.1	595.36
5	すり	石	安山岩	10.6	9.0	5.0	734.00
6	すり	石	安山岩	12.6	6.2	3.8	510.44
7	すり	石	安山岩	16.4	9.8	3.5	859.00
第4号住居跡							
1	打製	石斧	砂岩	13.2	6.0	5.1	607.29
2	磨製	石斧の未成品	凝灰岩	11.2	5.8	1.4	135.48
3	磨製	石斧の未成品	凝灰岩	9.4	3.8	1.9	118.00
4	すり	石	安山岩	9.2	6.7	4.0	347.00
5	凹	石	安山岩	11.7	8.2	3.9	598.36
6	磨製	石斧の未成品	砂岩	9.0	5.8	3.7	251.41
7	磨製	石斧の未成品	砂岩	21.2	14.4	5.1	2,200.00
第5号住居跡							
1	打製	石斧	ホルンフェルス	11.1	5.1	1.8	88.40
2	打製	石斧	ホルンフェルス	9.3	5.6	2.3	188.00

第1表 石器計測表(1)

番号	石 器 名		石 質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	
第6号住居跡								
1	打 製	石 斧	砂 砂	岩 岩	10.0 12.6	2.8 4.7	1.7 3.5	77.00 291.62
2	打 製	石 斧	斧 斧	安 山	14.8	11.5	3.5	564.00
3	打 製	石 斧	斧 斧	凝 灰	16.5	7.2	6.2	—
4	磨 製	石 斧 の 未 成 品	砂 砂	石 石	14.9	4.9	3.9	509.40
5	磨 製	石 斧 の 未 成 品	凝 灰	石 石	14.8	6.3	4.7	748.70
6	磨 製	石 斧 の 未 成 品	凝 灰	石 石	13.1	6.7	4.2	613.50
7	磨 製	石 斧 の 未 成 品	凝 灰	岩 岩	8.9	4.9	3.2	181.00
8	磨 製	石 斧 の 未 成 品	凝 灰	岩 岩	14.9	5.7	3.1	381.35
9	磨 製	石 斧 の 未 成 品	斧 斧	玄 武	5.8	6.4	2.1	114.00
10	磨 製	石 斧	器 器	黑 母 岩	14.5	5.3	3.3	406.93
11	碌	り	石 石	安 山	6.1	6.8	4.1	283.03
12	す	り	石 石	安 山	6.8	6.8	4.0	246.43
13	す	り	石 石	安 山	12.4	9.0	5.8	908.19
第7号住居跡								
1	打 製	石 斧	砂 砂	岩 岩	11.1	12.3	3.4	331.31
2	磨 製	石 斧	斧 斧	ホルンフェルス	8.2	6.1	1.5	74.61
3	磨 製	石 斧	斧 斧	ホルンフェルス	8.9	7.1	1.7	99.29
4	磨 製	石 斧 の 未 成 品	砂 砂	岩 岩	8.6	4.6	3.2	185.11
5	磨 製	石 斧 の 未 成 品	砂 砂	岩 岩	12.8	6.8	4.4	652.00
6	磨 製	石 斧 の 未 成 品	砂 砂	岩 岩	10.3	4.7	3.4	208.70
7	磨 製	石 斧 の 未 成 品	砂 砂	岩 岩	12.4	7.0	4.2	581.15
8	磨 製	石 斧	斧 斧	砂 砂	11.6	4.3	2.7	223.00
9	磨 製	石 斧	斧 斧	砂 砂	15.4	5.0	—	149.10
10	た た	き	石 石	砂 砂	10.6	6.6	4.7	175.00
11	す	り	石 石	安 山	12.6	6.6	—	391.80
12	す	り	石 石	安 山	11.5	8.5	—	537.45
13	す	り	石 石	安 山	7.9	4.6	3.6	210.63
第8号住居跡								
1	打 製	石 斧	ホルンフェルス	岩 岩	11.0	6.8	3.3	261.58
2	打 製	石 斧	石 英 片	岩 岩	15.1	6.8	2.4	273.37
3	磨 製	石 斧 の 未 成 品	凝 灰	岩 岩	11.9	5.9	3.8	377.30
4	磨 製	石 斧 の 未 成 品	砂 砂	岩 岩	10.0	5.4	3.6	324.45
5	磨 製	石 斧 の 未 成 品	砂 砂	岩 石	9.9	6.5	4.7	396.00
6	磨 製	石 斧	斧 斧	凝 灰	9.3	3.2	2.2	102.00
第9号住居跡								
1	打 製	石 斧	凝 灰	岩 岩	11.1	3.8	1.5	93.56
2	打 製	石 斧	凝 灰	岩 岩	11.1	4.7	1.8	168.50
3	打 製	石 斧	斧 斧	粘 板	10.1	7.2	1.9	173.49
4	磨 製	石 斧 の 未 成 品	凝 灰	岩 岩	12.0	5.3	2.8	284.32
5	す	り	石 石	凝 砂	11.8	7.3	2.5	337.00
6	た た	き	石 石	花 岩	9.6	7.8	4.8	482.15

第2表 石器計測表(2)

番号	石器名	石質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	
第10号住居跡							
1	磨製石斧	安山岩	16.3	4.9	2.1	211.69	
2	すり	安山岩	19.4	7.0	5.3	1,003.60	
3	すり	安山岩	15.3	7.2	5.0	811.00	
4	石皿	砂岩	27.5	17.6	9.8	3,980.00	
第11号住居跡							
1	打製石斧	ホルンフェルス	8.5	6.1	1.2	88.00	
2	磨製石斧の未成品	チヤート	14.9	4.6	3.4	334.51	
3	磨製石斧の未成品	凝灰岩	16.4	6.9	—	1,060.00	
4	すり	安山岩	10.6	7.8	3.5	396.53	
5	すり	安山岩	13.0	7.2	3.0	449.45	
第12号住居跡							
1	打製石斧	砂岩	11.3	7.2	1.6	125.46	
2	磨製石斧の未成品	凝灰岩	—	4.8	2.5	106.21	
3	磨製石斧	ジャモン岩	12.2	5.9	3.4	431.67	
土壌							
1	打製石斧	ホルンフェルス	12.5	3.7	1.9	109.00	
2	打製石斧	砂岩	10.3	3.7	1.6	67.52	
3	打製石斧	輝石片岩	—	4.8	2.0	96.67	
4	磨製石斧の未成品	凝灰岩	—	6.3	2.7	287.11	
5	磨製石斧の未成品	砂岩	—	5.5	3.3	298.00	
6	磨製石斧の未成品	凝灰岩	—	4.8	3.7	187.46	
7	磨製石斧	凝灰岩	—	6.2	3.5	304.28	
8	たき	砂岩	10.5	6.7	2.3	211.00	
9	すり	安山岩	11.5	8.5	3.6	492.44	
10	石皿	安山岩	30.2	20.3	7.1	8,600.00	
グリッド							
1	石頭	匙器	チヤート	4.2	4.7	0.7	9.50
2	尖頭	砂岩	12.8	3.3	1.8	84.00	
3	磨製石斧の未成品	砂岩	12.7	6.3	3.9	532.40	
4	磨製石斧	凝灰岩	15.9	5.3	3.1	461.25	
5	磨製石斧	凝灰岩	19.1	6.5	3.6	398.60	

第3表 石器計測表(3)



EX : 1-1 (第1号住居跡出土土器実測図-1) 第119図 出土土器拓影図(1)



7-1



7-2



7-4



7-6



7-10



7-5



12-2



8-2



8-6

7-3

第120圖 出土土器拓影圖 (2)



8-4



8-6



12-1



11-1



11-2



9-5



8-1

0 10cm

第121圖 出土土器拓影圖 (3)

## IV 結語

### 1. 遺構について

三ヶ尻林遺跡で検出された縄文時代の遺構は前期黒浜期の住居跡12軒、土壙22基(時期不明含む)であった。ここでは前章で触れなかった点も含めて、遺構を総括する意味で所見を述べてみたい。

三ヶ尻林遺跡で検出された住居跡は後世の遺構や攪乱等によって、切られているケースが多く見られる。従って、竪穴住居は壁面の無いものが殆どで、平面プランは住居壁下を巡る周溝(壁溝、以下周溝とする)によって判断できる。住居跡の平面プランは方形、あるいは長方形を呈し、周溝を有する住居跡は全体の%を数える。周溝は基本的には、住居跡の平面形態に左右されるものであるが、本遺跡の場合、拡張された第6号～第8号、第12号住居跡を除く他の住居跡は形態の大小にかかわらず壁面に沿って全周する傾向がみられる。(第9号住居跡の床面は疊層に直面し、他の住居跡と同様に掘り込めなかった点を考慮すれば基本的には周溝は全周するものと考えられる。) 拡張された住居の各々の拡張方向は一定しないが、これは遺跡の範囲が疊層に接している箇所が多い為、方位には関係なく、構築の容易な方向へ選択したものと考えられる。

次に住居内部の構造についてみると、柱穴は変則的なものも存在するが、6本柱穴を基本とし、そのバリエーションの中に複数の支柱穴を配する住居跡が存在するものと思われる。周溝内に存在する柱穴(6本柱穴以外のもの)は壁柱穴の流れの中で捉えられるものと考えられるが、上屋構造上はより臨時の要素を含んでいるものと思われる。支柱穴は第1号、第2号住居跡のように住居内の壁際に比較的集中するタイプと第4号、第8号、第10号住居跡のように住居の中央部に集中するタイプに分類可能である。しかし、遺構として残存状態は悪く、支柱穴の全容は判然としない点が多く、疑問の残る点である。また、第1号住居跡の南壁沿いには大型のピットが2基検出された。東寄りのピットからは無文の土器が2個体出土し、西寄りのピットからは土器の小破片が出土している。2基のピットは貯蔵穴として使用されたものと考えられるが、本遺跡の他の住居にはないピットであり、後述する埋甕や磨製石斧の未成品等の点も踏まえ、この集落の性格を考える上に重要な要素の一つに成り得ると思われる。

次に炉址は第3、12号住居跡に検出された。形態は地床炉で、焼土の厚みは3～5cmであった。第3号住居跡からは住居中央から約1m西壁寄りに3箇所、北壁寄りに1箇所検出され、第12号住居跡は住居中央から約1m北寄りの周溝沿いに1箇所検出された。炉址は第3号住居跡の西壁寄りの3箇所も含め、主体は北側にあったものと思われる。

土壙については検出された22基の中で、黒浜期と考えられるのは第9、13、28、40、43、44、48、50、52、54～57号土壙である。他の土壙については遺物を包含するケースも存在するが、層序、形態等から該期の土壙ではないと判断した。土壙の平面プランは円形または梢円形を呈し、長径1～2m、短径0.7～1.5m、深さ30～50cmの計測値上におさまり、覆土は黒褐色～暗褐色である。第44号土壙からは土器破片とともに焼石が底面付近より、他の疊とともに検出された。また、

第57号土壙は第8号住居跡の周溝を切って構築されているが、その出土遺物は第8号住居跡からの出土土器と類似し、第8号住居跡廃絶直後に構築されたものと考えられる。

一方、埋甕については5軒の住居跡から10個体、いずれも正位の状態で検出された。炉址としての機能も考えられるが、第12号住居跡のように地床炉を有する例が存在し、埋設された土器の位置が西側を除く辺に寄っている点や出土状況等から埋甕と判断した。埋甕論については、幼児埋葬器、胎盤収納器、建築上儀礼器などの用途が考えられているが、一用途では片づけられない問題を含んでいる。本遺跡の場合、第5号住居跡のように5個体の土器が埋設されている例や、第9、11、12号住居跡のように1個体のみ埋設する例も存在し、縄文人の精神文化として深く関与しているものと思われる。埋甕は一般論に捉われることなく土器様式や出土状況などをふまえた分類及び検討が必要と考えられる。

## 2. 土器について

三ヶ尻林遺跡における縄文前期黒浜期の土器群は殆どが住居跡等の遺構から検出されたものである。住居跡の多くは後世の遺構や擾乱などによって切られている為、各遺構における土器の出土量は多少変化している。ここでは床直面より出土した土器群を中心に本遺跡の土器群を総括する意味で所見を述べてみたい。今回の調査で検出された黒浜期の土器群は以下の特徴を持つものである。

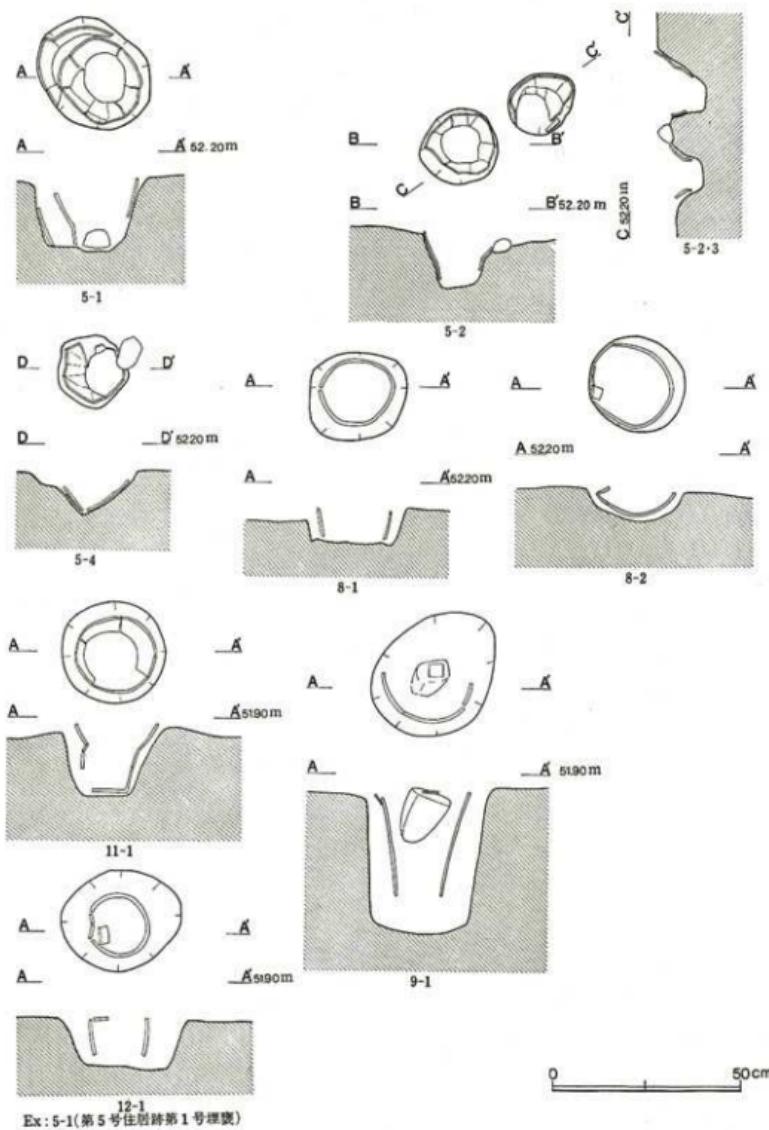
- i) 胎土に多量の纖維を含み、口縁部文様帶は半截竹管による平行沈線文、爪形文、コンパス文を主文様として、横位の平行沈線文、鋸歯状モチーフ（菱形区画と呼称するモチーフと同意であるが、施文順序を考慮するとその基本的コンセプトは菱形とは異なる）などが多く用される。
- ii) 地文の縄文は単節R L及びL Rの斜行縄文は意外に少なく、R L及びL Rを各々横位に回転施文し、羽状縄文を構成するものが多出化する。さらには、無節R及びL、同羽状縄文も単節のものと出土量は同様の比率を示している。また、出土量は上記の土器群を下回るが、附加条も比較的多くみられる。

以上は出土土器の大部分を占めるものである。しかし、出土量は少ないが、以下に示す土器群も黒浜期に比定されるものと考えられる。

- iii) 胎土に纖維を含まず、半截竹管による平行沈線文、爪形文、刺突文を主文様に鋸歯状モチーフ等を構成する。
- iv) 地文の縄文は単節R L及びL Rの斜行縄文が多出し、羽状縄文は減少する。また、黒浜期の縄文原体によく見られる撚りの稚拙な原体に混じって、諸磯a期にみられるような撚りの細かい原体がみられる。

以上が本遺跡の土器群の大きな特徴と言えるが、この他に少量ではあるが無文の土器群が存在する。無文土器の大半は台付浅鉢であるが、一部小形の深鉢も存在する。また、底部については纖維を含む土器群は殆んどが上げ底を呈するが、無纖維のものは平底が殆どを占めるようになる。口縁部については波状口縁及び、平縁のものが多く、波状口縁の土器群は4単位（2単位）のものが多い。

三ヶ尻林遺跡の土器様相としては半截竹管による平行沈線文のヴァリエーションの豊富な点があ



第122図 三ヶ尻林遺跡出土埋甕